

102291169

橫井時雄著

基督教新論全

發兌 警醒社書店



19-277

故山崎爲徳君の紀念の爲に謹んで此書  
を獻す、  
天成の學者、忠烈の義人、自ら抱負するや  
高くして人に屬望せらるゝや大ふり、不  
幸短命にして死す、而し茲てに十周年、此  
の多事多望の秋に至り、豈に君を思ふこ  
と無らんや、聊か記して微志を表す

### 基督教新論自序

此の小冊子の目的は出来得べき文煩雑なる哲學的神學論を避けて純粹なる基督教の信仰を説明せんとするに在り、憶ふに神學說や儀式慣行や素より時勢の必用に迫まられて生じたるものかれは其時代に於ては甚た必用のものたりとなり、然れども永世同一の神學や慣行を維持し得べきに非ず、必ずや時代と共に、邦國と共に、社會の變遷と共に、多少の變化なかるべからず、故にギリシヤ神學あり、ロマ神學あり、獨逸神學あり、又日本神學起らざる可らず、但た吾人は此の變遷の間に

*"Men found continually that the further they went down into themselves the more there was of corruption and darkness and evil, till at last they supposed the very root of their being was nothing else. S. Paul had gone down into these depths; he had found this rottenness; in himself he says he found only that. But he discovered that there was a root below himself, a true divine root, for himself and every man. He found that each man, when he tries to contemplate himself apart from Christ, is that evil creature in which no good dwells. But no man, so he teaches, has a right to contemplate himself apart from Christ; God does not so contemplate him. He was formed at first in the Divine Word, in him he lives and has his being still."*

F. D. Maurice.

在つて變遷せざる宗教の實事を確守して動かざるを要す、譬へば風船に駕し天に飛揚して寄る處なきを以て終に海上に落つるが如くならずして、却て大丈夫が着々乎として大道を歩むが如くならんことを要す、夫れ基督教は素と一種の哲學を基として起らずして、永遠不朽の道德上の眞理と、万古不易の宗教上の意識と、確乎不拔の歴史上の事實とに基づきて起れり、此の三者は實に基督教信仰の鼎足にして、其万世一統たる所以亦實に是に在るなり、若しも之に反して基督教は一種の哲學思想を根據として起りたらんには、哲學思想の變遷する毎に其根元より變化せざる可らず、

本書名づけて基督教新論と云ふものは基督教の本體をば哲學的思想より區別して理解し、且つ之を哲學的思想に據らずして説明せんと勉めたるが故なり、書中に主張する基督教信仰其自身は即ち使徒時代の信仰に外ならずと雖も其説明の方法に至つては從來歐米に流行するものと稍同じからざるものあり、是れ敢て之を新論と稱する所以なり、  
本書に載せたる諸篇中には去る二ヶ年間に於て基督教新聞社説として登載せしもの少あからず、此等は十分に訂正潤刪したれば殆んど新稿と成りしもの亦なきに非ず、

在つて變遷せざる宗教の實事を確守して動かざるを要す、譬へば風船に駕し天に飛揚して寄る處なきを以て終に海上に落つるが如くからずして、却て大丈夫が着々乎として大道を歩むが如くならんことを要す、夫れ基督教は素と一種の哲學を基として起らずして、永遠不朽の道德上の眞理と、万古不易の宗教上の意識と、確乎不拔の歴史上の事實とに基づき、起り、此の三者は實に基督教信仰の鼎足にして、其万世一統たる所以亦實に是に在るなり、若しも之に反して基督教は一種の哲學思想を根據として起りたらんには、哲學思想の變遷する毎に其根元より變化せざる可らず、

本書名づけて基督教新論と云ふものは基督教の本體をば哲學的思想より區別して理解し、且つ之を哲學的思想に據らずして説明せんと勉めたるが故なり、書中に主張する基督教信仰其自身は即ち使徒時代の信仰に外ならずと雖も其説明の方法に至つては從來歐米に流行するものと稍同じからざるものあり、是れ敢て之を新論と稱する所以なり、  
本書に載せたる諸篇中には去る二ヶ年間に於て基督教新聞社説として登載せしもの少からず、此等は十分に訂正潤刪したれば殆んど新稿と成りしもの亦なきに非ず、

明治廿四年十一月

著者謹識

四

目次

第一章	宗教とは何ぞや……………	一頁
第二章	他宗教實地の成績……………	五頁
第三章	基督教とは何ぞや……………	十頁
第四章	キリストの人物(一)天眞爛熳……………	十七頁
第五章	全上 (二)仁愛化身……………	二十一頁
第六章	全上 (三)幸福圓滿……………	二十六頁
第七章	全上 (四)自捐謙卑……………	三十一頁
第八章	神に関するキリストの意識……………	三十五頁
第九章	キリストの十字架……………	三十九頁

第十章 キリストの超絶せる品性及び奇跡……………四十五頁

第十一章 キリストの復活……………五十三頁

第十二章 復活に關する懷疑說(一)閉息說……………五十九頁

第十三章 全上 (二)幻夢說……………六十五頁

第十四章 聖靈の恩化及び基督教徒の意識……………七十二頁

第十五章 使徒パウロの信仰……………七十八頁

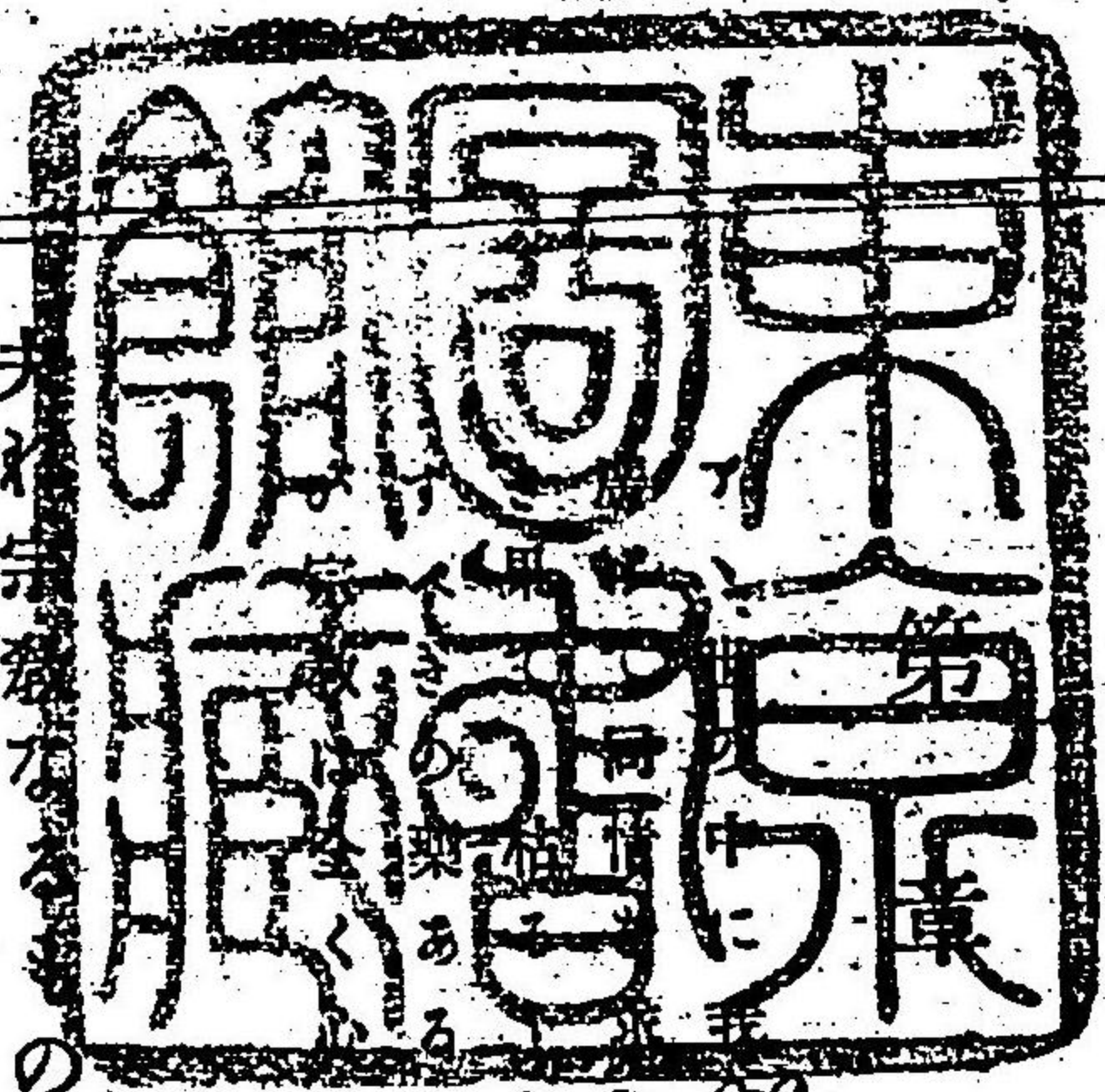
第十六章 キリストの自言……………八十六頁

第十七章 祈禱……………九十三頁

以上

基督教新論

横井時雄著



宗教とは何ぞや

如き依頼的のものは有らず、我は我が凡ての根と葉とを  
 而して若し我は同情を吸取するを得ざる時には忽ち乾  
 なり、此れ實に我が資性の根本なり、我は此の我が資性を醫  
 するを知らず、若し之れ有りさするも我は醫さるゝを好まず、我  
 情の宗教あり、他の宗教は我に用ふし、  
 シュライエルマーヘル

宗教は神  
 學や儀式  
 に非ず

夫れ宗教なるものは一種の思想に非ず、神に付き、來世に付き、或は經典  
 に付き、吾人の脳髓中に一種の思想を形成することに非ず、また宗教  
 は一種の行爲に非ず、禮拜の儀式を守り或は斷食苦行するが如きは未

學者輩が  
宗教を輕  
んずる所  
以

宗教は何  
ぞや

だ以て宗教と稱す可らざる也、夫神學の思想や禮拜の儀式やこれみな宗教に隨伴して容易に離つ可らざるものなるべし、又人の心に宗教を起し且つ之を維持するに於ては頗る必要なるものに相違なしとす、然りと雖も衣服は肉躰に非ざるが如く、更に又肉躰は精神に非ざるが如く、神學や儀式は宗教其自身に非ざる也、世の學者輩多く宗教を好まざるは實に宗教を好まざるに非ず、宗教に伴ふ或種の附帶物を好まざるのみ、宗教其自身に至つては此の世に生きとし生けるもの孰れか之を敬ひ之を好まざらんや、

然らば則ち何をか宗教と云ふ乎、曰く此れ人心の最も高くして最も貴き時の状態あり、之を稱して至上の平和最大の幸福と云ふも可ならん、別語以て之を云はゞ宗教は生命なり、各人其不平不満憂悲絶望の境を脱して天地の運命と理法とに親和契合し以て永生の靈を得るに在り、

人生の不  
如意は即  
ち宗教の  
起る所以

更らに別語を以て之を云はゞ宗教は光明なり、各人その罪惡と汚穢とを棄て大に其良心を明かにし以て天に對し人に向ひ一點塊つる處なきに至るに在り、  
蓋し世間の事一として意の如くなるもの有らず、内は我が胸中方寸間の事よりして外は人間社會に對する吾人の運動に至るまで、一として心を満足せしむるに足るものあらず、或る智者が曾て曰ひし如く、此の世界は之を望んで見れば甚だ大なりと雖も若し之を手に取りて見れば甚だ小なり、吾人は万事万物に付て不如意の感を催さるはなし、不如意なるが故に失望落膽し又悲哀歎息す、嗚呼我心は道德上の完美を希ふ、即ち肉躰の慾に勝ち私心の勢を殺し以て至善に達せんことを希ふなり、然れども罪惡の跋扈容易に挫く可らざるものあり、況んや全く之に打勝たん事をや、嗚呼吾人は我が經綸企圖の社會に行はれんこ



宗教家たらん乎非宗教家たらん乎

自己を知るは宗教に入るの門

とを希ふ、然れども天運の之に逆ふこと多く、吾人の計畫の微塵に破砕せらるゝこと十に八九なり、吾人茲に至つて我意と天命との衝突避く可らざるを見るなり、而して宗教の問題は實に此の間よりして生じ来るなり、天道は是耶非耶、吾人は我意を是とし、天道を非とし、我が計畫を理とし、天命を非理として、終生天運に向つて敵對せん乎、此れ我が靈生の滅亡ならん、吾人の自らを非とし己れの罪惡を慚悔し以て天命と親和契合せん乎、此れ即ち永遠の生命ならん、前者は宗教に反對する人にして後者は即ち眞の宗教家あり、然れば宗教は哲學や論理や批評や史論やに由つて起らずして、自己の微小と荏弱と罪惡とを知り、洪大無邊なる天地永生の靈氣に感動せらるゝに始まる、故に自己を知るもの耳能く宗教の何たるを知るを得べ

き也、此の心なくして而して宗教を論ずる者はこれ聾にして音樂を論ずる者と一般、彼れ其の言ふ處の何たるを知らざる也、何そ與に宗教の事を論ずるを得んや、聖書に曰く神は碎けて謙る心に住み給ふと、又曰く心の貧しき者は福なり、天國は即ちその人のものあれば也、實に然り、宗教の起原は信賴の念と罪惡の感とに在り、宗教の目的は平和と聖善とに達するにあり、若し夫れ吾人の心に光明充滿し靈氣洋々たるに至らば吾人は即ち宗教を有つものなり、

### 第二章 他諸宗教の實際上の成績

凡ての宗教は異口同音に人心の悲哀と苦痛とを表白す、即ち有限的の制下にあつて、或は人命の短なること、或は前途の昏闇ふるとに由て、或は壽命を維持せんとして骨折るとに困て、或は愈増しに心に感せらるゝ處の己れの墮落せる状態に付て、或は自己に敵對する處の罪惡の勢力と抗爭することに由て、凡て是等の故により起る處の悲哀と苦痛とを表白す、而して此く悲哀

と苦痛を表白すると同時に人心の潔白なる目的、其高尚なる理想、及び其の滅す可らざる希望を表白する、こまた無きに非ず  
イライシヤ、モルフホルド

紀元前四  
五百年紀

紀元前四五百年紀の頃の人類の史上何等の盛代なるぞや、支那印度に孔子釋氏起りギリシヤ國にソクラット、プレトウ起れり、千古の大聖皆な相期約するが如く、東西南北に起つて億兆の師表となれり、且つ又エダヤの國に於て、紀元前七八百年の頃に於て預言者ある聖賢、頻りに踵を接して起り、上帝の眞理を唱へて以て時の昏闇を照らせり、故に基督世に出づるの頃は此の諸宗教(余は廣闊なる主意を以て茲に此の文字を用ふ)は既に孰れも數百年の星霜を経て明かに其實際上の成績を示呈せり、今その成績に付て觀察せば果して如何、吾人は之を通觀して此の諸宗教は悉く非眞理なり、又其中に在つては一人として眞正に宗教上の開悟に達せしものあらずと云ふを得ざる也、其の尤も適切なる例を擧れば、該の祖師

唯だ少數  
の人のみ  
宗教を得

たる聖賢の如き、實に卓々乎として雲表に聳ゆるの偉人輩にして、其心中に開悟したる宗教上の實事に至つて吾人後輩の決して批議すべき限りに非ざるなり、吾人は此の諸聖賢の心には眞理の光明昭々乎として之を照らし、生命の靈氣は洋々乎之に満ちしことを信せざるを得ざる也、然りと雖も此れ唯だ少數なる明哲に止つて、千万人中僅かに二人耳、其の多數の如きは或は偶像を信じ或は儀式に隸し終に開悟の域に至らずして止みたり、彼等は或は天の理法を信じ或は運命の犯す可らざるを知れり、彼等は其理想とする處に達せんとして骨折れり、然れども終に其志望の成らざるを知りて失望落膽せり、古今幾千年、東西幾万里、何處も同じ秋の夕暮にして、慘澹たる嗟歎の聲齊しく起つて吾人の耳に滿つるに非ずや、支那日本に行はれたる儒佛教の普通の状態を目撃する者は我が言の誣ひざるを知らん、又パウロは素とユダヤ

多數の人  
終に之を  
得ず

教中<sup>きんぐ</sup>錚々の間<sup>ま</sup>にありける壯年宗教家あり、彼れ自己の實驗を告げて曰く、我れ律法の善なるを知り之を行はんと勉めたり、然れども勉むれば勉むる程に其事の難きを知れり、我が本心には善を願へども我肉慾は頻りに我を襲撃し屢々我を虜にして惡を行はしむ、嗚呼我れ惱める人なる哉、此の死の躰より我を救はんものは誰ぞやと、ローマ書七章、我れ讀者諸君の良心に訴へて之を賀さん、諸君の實驗亦た實に斯の如くあらざるや、宗教上人生の悲劇實に此の點に在つて存す、

紐元前後  
ローマ國人  
心の状態

基督教の將さに起らんとする時に際してや當時の世界たるローマ帝國中の人心は實に此の悲劇の極點に達したりき、其の表面より見れば幾百年間曾て之をかりし泰平の祥雲は天下を覆へり、エナス神の宮は閉ぢられけり、ローマの宗教、ローマの政治、ローマの文學、ローマの技藝は實に此の時に於てぞ其盛運を極めぬ、然りと雖も若し其裏面に立ち入りて宗教

上人心の状態を觀察すれば厭世の念、失望の心は宛も妖夢の如く國民一般を壓せり、當時の詩人、文學者、道德家は皆な異口同音に人心の不平不満を言表せり、綱紀紊亂して風俗潰敗し、驕奢風をかし、殘忍酷薄是れ時の人情たり、滔々たる其勢、宗教も、文學も、道德學もみあ共に終に之を救ふ能はざりし也、

日本現時  
の状態

今や我邦の状態豈に頗る之に類するものなからんや、文學盛ならざるに非ず、國法嚴正ならざるに非ず、技藝進歩せざるに非ず、然れども國民の元氣は殆んどみな滅亡し去りて、驕奢の風、猜疑の念、天下に滿つ、人心の離背、風俗の潰亂、日に益甚しくして、怨嗟失望の念は將さに魔風の如く我邦人を襲はんとす、此時に當り佛教已てに墮落して復た起す可らず、儒教亦衰頽し再び我邦道德上の主動力となる能はざるや、明けし其盛時に於てすら、眞に其恩澤に沐浴して宗教的の開悟を得しものは千

万人中僅かに一二人のみ、況んや其衰時に於てをや、嗚呼誰か我日本人  
將來の光燈となり、其の救主たらんとするものぞ、我邦現今の事情は實  
に有力なる宗教の起るを待つなり、

### 第三章 基督教とは何ぞや

神は昔まぎくの區別をふし多くの方法を以て豫言者により列祖に告げ給  
ひしが此の末の日には其子に託りて我儕に告げ給へり

帝伯來書

或は曰くキリスト教は嚴正なる道德の法則を設けて人心を束縛する  
ものなり、或は曰くこれ空漠たる未來の冥福を求めて現時の善業實務  
を怠るものなりと、その他世評紛々、多くは皆キリスト教の一斑を見て  
未だ全豹を知らざる者なり、

夫れキリスト教は高尚なる道德いさどくの法則はふそくを教ふ、然れどもモーセ孔子の

世人の誤解

如く之を教ふるを目的として教へたるものにあらず、又高尚なる真理  
を教ふ、然れどもソクラット釋氏の如く理論を以て之を説明せしものに  
非ず、其目的とする處は實に真理を明にし道德を興すに外ならず、然れ  
ども其方法に至つては此諸教と大に異なる處のものあり、

凡そモーセ孔子の如く倫理の法則に由つて以て道德を起さんとする  
事の弊は、人心を束縛きんばくするに苛酷かこくある死法を以てし終つひには偽善的の人  
物を輩出せしむるにあり、ソクラット釋氏の如く理論を以て真理を明か  
にし以て道德を起さんとする事の弊は、妄想ぼんそう空理くうりに馳せて却て純朴明  
白なる真理を見失ふにあり、空理妄想に流れず束縛偽善に陥らず、真理  
を明かにし道德を振興し、以て自由にして生命ある善人を起すはそれ  
只キリストある乎、

キリスト教の本旨とする所果して奈何ん、曰くイエス、キリスト是なり、

他宗教の弊

其目的とする所は何ぞや、曰くキリストを吾人の身に實現し其教旨を今の世に實行するこれなり、夫れナザレのイエスはローマの大帝オウガスタス、シーザの宇に、ユダヤの國に生れ、上帝の特撰によりて救世の大道を立てたる人なり、抑もユダヤ人民は太古より宗教思想に富むの民にして、ローマ人民が政法を以てギリシヤ人民が學問美術を以て今の歐米文明諸國の師となりし如く、ユダヤ人民は宗教と道德とを以て歐米文明の師となりし程にて、古來預言者なるもの踵を接して此の國に起り、上帝の道を宣傳し宗教と道德を振興したり、而て其主意の歸する所は、上帝ユダヤ人民を撰んで之に宗教と道德の道を示教し、之をして全世界の師たらしめんとす、又殊に後世一の救世主を遣り之をして救世の大道を敷き、世界の民をして來りて其恩澤に沐浴せしむべしと云ふにあり、扱ユダヤ人民はすでに斯かる希望自信を抱くにも關らず、紀元

前五六百年の頃より屢々外敵の犯す所となりて自國獨立の基礎堅立せず、外國に隸屬するの年多くして自立するの日は甚だ少なかりしあり、先賢垂教の主旨たるユダヤ人民は全世界の師となり、大王此國より起りて、仁義の國を建立し、全世界の民は來りてその恩澤に沐浴すべしと云ふの絶大の希望も、日に益その成就を見ること難きに至れり、然れども彼等は尙ほその希望を抱いて屈せず、愈抑へらるれば愈昂り、終に紀元の頃に至れば革命の時機は益熟し、人民は一般に思へらく、大王の來臨將に近きにあり、數百年來屢々蒙りし國家の恥辱を雪ぎ、起つて全世界を征服し、仁義の政を施て以て世界の民を安堵せしむるの時遠からずと、イエスの世に出しは實に此の時代にあり、  
イエスはユダヤの愛國者なり、國民の希望感慨は樂師の雙手の如くイエスの心は樂器の如く、一としてその心に響應し同情を發せざるはな

かりき、少時より人民の苦痛と共に苦み、人民の感慨と共に感慨し、又人民の希望と共に希望したり、其長するに従ひ自ら大任の身に存するを覺悟するに於て、その人情より云はゞ直ちに國民待望の機に投し以て自國の獨立を謀り、善政を行ふて以て世界の幸福を來たすの方針を取らんこと、是れ尤もその喜ぶ所なりしならん、然れども上帝の大命はここにあらずして却て當時の人民の聞て甚だ失望せし所の方針にありき、夫れ一時善政を施して以て表面の治平を來たすことは、善は即ち善なりと雖も、人間の心を一洗しその罪惡を清め、之をして自立して以て眞正の治平を成さしむるの善なるに如かず、此を以てキリストは區々として世の政事風俗の弊を矯むるを事とせず、單に躬自ら上帝の心を示し人間の品格を表はし、人に向つては其正義仁愛の言行によりて上帝を代表し、上帝に向つては其の敬虔従順の徳によりて人間を代表し

たり、

キリスト  
は誰ぞ

キリストの完全の人にして、又その中に上帝の靈充盈せり、故に其言行悉く人間の言行ありと雖も亦悉く上帝の言行なりし也、上帝の思想とキリストの心思とは始終全く同一し、其間髪を容るゝの差別もなかりき、其機能は實に人間の爲し能はざる所をなし、其意識の時々人間以上に達して、神と同躰なるの覺悟を有せり、然れどもナザレのイエスは怪異の人物にはあざりき、彼は人間の罪惡を見て悲しみ、人間の憂愁を思ふて憂ひ、其患ひと其病を一身に負ひ、之を救はんが爲めに遂に十字架に釘られて死せり、死して後その弟子等に現はれて曰く、我實に生るなり、今より後我窮りなく爾曹と偕あるべしと、是に於てキリストの教會起れり、信徒等常にキリストを愛しキリストを懷抱し、キリストの精神を以て精神とし、キリストの目的を以て目的とし、キリストの品格を

基督教の  
信仰

以て品格となせり、彼等は古き私を殺し古き人物を脱却して新たなるキリスト的の人物とされり、パウロ其信仰を論じて曰く、我キリストと僭に十字架に釘られたり、既われ生けるに非ずキリスト我に在て生るあり、今われ肉體にありて生るは我を愛して我が爲めに己を棄てし者、すなはち神の子を信するに由て生けるなりと、(加二〇廿)又此信仰より生じ来る所の成果を論じて曰く、靈の結ぶ所の果は仁愛、喜樂、平和、忍耐、慈悲、良善、忠信、溫柔、樽節と、(加五〇廿二)之を約言すればキリスト教の本旨は、キリストを信じ且愛し、吾人の心志言行を擧げて彼と同化し以て神の子とあるにあり、又我國家を擧げて、延ては全世界を擧げて、キリスト教の主意に同化せしめ、以て天國となすにあり、全世界皆キリストの主義に化し終れる時は即ち世界文明の終局にして、万物進化の頂上ならん、此れ即ち基督教なり、故に曰く基督教ハキリストなりと、

#### 第四章 キリストの人物(一)その天真爛漫

われはシヤロンの野、花谷の百合花あり

雅歌二〇一

天下古今に亘りキリスト教の事に關して物論の囂々たる中に、敵も味方も異口同音に驚歎賞譽止む能はざるものあり、他なしキリストの人物これなり、ゴエテ曰く神に非ずんば世に現はすこと能はざる程の神の如き人物なるイエス、キリスト云々、ルーツウ曰く若しソクラットの死は聖人の死なりしならば、イエスの生涯と死とは神の生涯と死とにてありきと、トマス、カーライル曰くナザレのイエスはこれ人類の最も神聖なる表號なり、人間の思想は未だこれより以上に達するを得ずと、ナポレオン曰く凡てこれらの人々は古來の英雄を指して皆人間なりき、余も亦人間なり、然れども此等の中一人としてキリストの如きものあらず、イエス、キリストは人間以上のものなり、アレキサンドル、シーザ

ゴエテ、  
ルーツ、  
カー、  
ライル、  
ナポレオ  
ンの評

ル、シヤリマン及び我自身の如き、孰れも巨大なる帝國を興したり、然れどもこれ果して何に基るせしや、腕力に基るせしなり、獨りイエスは其帝國を愛に基りて起せり、而して今日に至るまで彼の爲めには一死を惜まざるの徒實に幾百万の多きありと、以上はこれ基督の教會に屬せずして、キリストの信徒と公言せざる人々なり、彼等にしてキリストを見るに猶且つ斯の如し、況んや終生身をキリストに委ねて、其奴僕たるを以て生涯の榮となすものに於てをや、然りと雖も吾人は單に他人の言を聽き其言ふ處に従つてキリストを信じて甘んずるものに非ず、吾人は往古のサマリヤ人等が井邊の婦人に告げし如く、爾の言ひしが故に非ずして吾人今親しく見て以て彼を信ず」と云はんとす、請ふ余輩をしてイエスの人物に付て感ずる處の一二を言はしめよ、余輩は代言人が法廷に出で、辨護するが如くキリス

トを世の聖人等と較べ偏讚せんとするに非ず、或は政治家が反對黨の首領を攻撃する如く釋迦や孔子を攻撃せんとするに非ず、余輩の信ずる處によれば、キリスト、イエスの一種特別なる所、其實に類を異にし、伍を別にする所のものは、之を見るの眼識ある人には自ら分明あらん、若しこの眼識なき人にとつては、辨護するも益なく、攻撃するは却て大害あらん耳、

天真爛漫

キリストの天真爛漫、曰く其道德はニザヤ人の規則的道德にあらざり、其思想は全く時の學者や學派の套語慣行を脱す、其行狀は少しも完全を作為する處なし、而して其高潔ある處、其優美ある處、其人情に近き處、其思想の高き所、之を譬へば迅雷の如く、風雨の如く、野の百合花の如く、清泉碧流の如し、吾人がキリストを見るや、彼は衣冠を着け端坐して嚴肅に道德の説法をなさず、却て彼は浴衣を着し素帶をべめ、吾人を伴ふて



出ては庭内の花鳥風月を眺めしめ、入ては吾人と共に茶を喫し飯を食し、小兒と戯れ、老人と語るが如し、而して不知不識の間に人をして己れと同化せしむ、往古の詩人は、相見兩不厭、只有敬亭山と吟せしことあるが、吾人の多くの善人君子の人物を慕はざるに非ず、賢者聖人の跡を追はんとせざるに非ず、然れども古往今來、朝に夕に、繁忙の時に、閑散の日々に、起きては其痕を踏み、眠りては其人を夢み、之を妻に語り、之を子に傳へ、窮りなく相見て厭かざるは、只だ、イエス、キリスト一人有るのみ、豈に人類の理想はこのナザレの人に於て成就せしに非ずや、豈に宇宙玄妙の理法は凝りてこの眞人物、この聖者と化せしに非ずや、荒々渺々たる曠原大澤の間、唯この一大花輪、日光を飲み、雨露に濕ひ、雪の如く白く、氷の如く潔く、而して笑つて吾人を迎ふるあり、天下万世の衆生、豈に來りて眺め樂み、且之より發揮する聖靈の氣を呼吸して、再生せざる可けん

や、

第五章 キリストの人物(二)仁愛の化身

人の友の爲めに己れの命を捐つるは此より大なる愛はなし

約十五〇十三 我は善牧者なり、善牧者は羊の爲め命を捐つ 約十〇十一

聖書に曰く、イエス、遍く郷邑を廻り、その會堂にて教をなし、天國の福音を宣べ傳へ、民の中なる諸べての病すべての疾を愈せり、牧者なき羊の如く衆人なやみ、又流離にありし故に之を見て、憫みたまふとあり、(太九〇三十五)蓋しこれイエスがガリラヤ地方に傳道せし時の有様を記せしものにして、余輩は讀んでその憫憫心の深さに感せずんば、非ざるなり、蓋し福音書中キリストの憫憫を記すは、唯この一ヶ處のみならず、イエ

イエスの  
憫憫

ス曾て人を避けてガリラヤ湖の東岸に行きしに、群衆は之を聞き追従して来れり、其多きこと幾千人なるを知らず、イエス彼等が三日間の食なくして己れに従ふを見て憫み云々とあり、最後に橄欖山に上りエルサレム城中を眺め人心剛愎國命方に盡たるを想ひ悲歎の涙に咽びて曰く、噫、エルサレムよエルサレムよ、母鶏の雛を翼の下に集る如く我なんぢの赤子を集めんとせしこと幾たびぞやと、チャニンング氏の曾てキリストの此の涙はその凡ての教よりも優つて價值ありと云へり、又末日審判の事を譬へて告げて曰く、人の子おのれの榮光を以て来る時は其榮光の位に坐し万国の民を其前に集め、羊を牧ふもの、綿羊と山羊とを別つが如く彼等を分ち、右に居るものに云はん、吾父に恵まるゝ者よ来りて創世より以來なんぢの爲に備へられたる國を嗣げ、蓋はなんぢから我飢ゑし時われに食せ、渴きし時我に飲せ、旅せし時われを宿らせ

イエスの  
博愛

裸なりし時われに衣せ、病みし時われを見まひ、獄に在しとき我に就ればなり、…既に爾曹わがこの兄弟の(全人類を指す)最微者の一人に行へるは即ち我に行ひしなりと、又彼は終に至るまでイスカリオテのユダを愛せり(約十三〇二)、又彼れ當時の學者祭司等の全く見棄てたる税吏娼妓を愛せり、彼の愛はサマリヤ人種を抱有し、ツロとシドンの一寡婦を抱有し、異邦人を抱有し、全世界の人類を抱有したり、後年使徒パウロがキリスト、イエスに在つてはユダヤ人またギリシヤ人、或は奴隸あるひは自由あるひは男或は女の區別なし、蓋は爾曹みちキリスト、イエスにありて一されば也と云ひしは蓋しこの意を敷衍せしものなるべし、

イエス其  
敵を愛す

イエス曾て教へて曰く爾の敵を愛せよと(太五〇卅八―四十八)而して彼自ら此教を實行せり、先きに引證せし處の橄欖山上にてエルサレム

人民の爲に泣き給ひしことの如き、實に好適例の一なり、又終に十字架に釘せらるゝに際し其敵の爲めに祈りて曰へり、父よ彼等を赦し給へど、此等は以てイエスの心中一時一刻と雖も復仇怨恨の念を懷きしことなきの明證とすべし、イエスは時として怒り給はざりしに非ず、然れども其怒は愛より出るの怒なりしなり、イエスは實に正義の人なりし、然れども彼の正義は何時も愛に根ざりて發せり、古往今來世人の敵對を受くることの甚だしきキリストに過ぎるものある可らず、然れどもイエスは一人の敵をも有せざるなり、嗚呼復仇怨恨の執念、結んで解けず、北海の氷雪だも雷あらざる處の此の人間世界に於て、茲に未だ曾て一回だも心に悪意を懷きしことなきの人一人ありしと、豈我人類に取つて絶大なる希望の基本に非ずや、使徒パウロが余はキリストと其十字架の外何も知るまじと心を定めたりと公言するものは、蓋しこの

理由に出づるものにして、イエスの十字架は實にその純全高潔なる愛の發表に外ならざれば也、

何故にキリストの人物は他の聖人等の如くならずして天真爛漫自然に發して無心に終り、毫も人造作爲の跡を示さざるや、何故にイエスの天下萬世に亘りて獨り以て天眞理想の人と稱すべき人ありや、余輩は之に答へて、此れ彼は愛の化身なりしがためありと謂はんとす、愛の精神はキリストの中に全く充盈り、故に其一動一靜その一言一思み悉く天地の大道に當らずと云ふことあり、故に古今天下の人もし一たびキリストを仰ぎ觀るの樂を知らば假令水火の刑に遭ふもその樂を更ると能はざる也、曰ハネ曰く我儕その榮を見るに實に父の生みたまへる獨子の榮にして恩寵と眞理にて充てり、パウロ曰く我儕鏡に照らすが如く主の榮を見、榮に榮いや増りて其同じ像に化るなりと、

第六章 キリストの人物(三)幸福圓滿

心の貧しき者は福なり、天國は即ち其人のものふればあり、哀しむ者は福あり、其人は安慰を得べければあり、柔和なる者は福なり、其人は地を嗣ぐことを得べければあり、飢渴して義を慕ふものは福なり、其人は飽くことを得べければあり、矜恤ある者は福なり、其人は矜恤を得べければあり、心の清きものは福なり、其人は神を見ることを得べければあり、和平を求むるものは福あり、其人は神の子と稱へらる可ければあり、義きこゝの爲めに責めらるものは福あり、天國は即ち其人のものふればあり 山上垂訓

イエス、キリストがガリラヤの丘上に立ち天國の福音を宣傳し給ふの有様を想像するに宛もこれ春風肥馬に跨つて花蝶の間を馳するの貴公子に似たり、蓋し天恩もどより優渥にして人生は決して悲哀の場にならず、罪惡と昏愚とは此世界の表面を覆ふに相違なしと雖も人もし神に歸服してその道を歩まば心中の希望歡樂至れり盡さずと云ふことなかるべし、キリスト自ら既に一點の罪惡なき神子の心あり、故に希望

歡樂その心に充盈す、山上の垂訓は實に福なりとの祝意を以て満つるに非ずや、

イエスは幸福の人

イエスキリストを稱して患難の人苦痛に慣れたる人と云ふ、古來歐洲の教會にありてキリストを論じ或は畫かく者は多くキリストの十字架の苦みを形容し或は愁苦悲痛の満面に溢るゝの狀を寫すを常とす、此素よりよくキリスト生涯中の一斑を見たるものに相違あしとす、雖然余輩を以て之を見れば此れ僅かにイエスの表面の相を見て未だその中心の真相を穿たざるものありと謂はざる可らず、粟菓を把り其幾多の刺あるを見て粟菓は刺ありと云ふものは未だ能く粟菓を説明するものと云ふ可らず、大風吹き來つて大洋の水面立どころにして千山万岳をなすを見て、洋底の潮流亦その震動を蒙ると思惟するものは未だ海潮の事情に達せりとなす可らず、キリストが人生の悲哀を感じ、人

の罪惡に代つて苦み、其身に人間の諸の罪惡疾病苦痛を負ひ給ひしこ  
 とは聖書の明言する處にして吾人の深く信ずる處あり、實にキリスト  
 の十字架はこれ人間の依て以て其救を得る處のものたるに相違あら  
 ざるなり、雖然大に罪惡に感じて苦みしものは古今唯キリスト一人の  
 みに非ず、其數實に多しとす、唯獨りキリストの苦痛のみ善く人間の救  
 ひとある所以のものは他なし、これキリストは素と幸福圓滿の人たり  
 し、故に非ずや、幸福圓滿の人にして而して世人の爲めに無上の苦痛  
 悲愁を嘗む、これ豈キリストの苦痛の價値ある所以に非ずや、  
 此世に生れ出てより死に至るまで、一時一刻も天意に悖らず、人道に背  
 かず、其生涯の間未だ曾て一たびも私慾の念を起さず、私意の情を挟ま  
 ず、言思悉く一致して、仇敵をも亦愛す、無心慮意にして、右手のなす善は  
 之を左手に知らしめず、専心一意天命に従ふの心ありて、名利の誘惑に

神人合一  
 これ幸福  
 の基

陥いらず、人と自己を比較して他を議するの心なく、謙卑自ら居りて人  
 の善を成すをこれ樂む、之を譬へば其心は空の鳥の如く平安に、其身は  
 野の百合花の如く高潔なり、誰か云ふキリストは幸福圓滿の人に非ず  
 と、イエス解さるゝの前夜弟子等に告げて曰く我が平安を爾曹に與ふ  
 と又曰く我が喜びを爾曹に遺すと、斯く十字架と苦痛とは眞暗黒の夜  
 の如く其面前に横はるに際して我平安と喜悦とを爾曹に贈ると云ふ、  
 豈キリストは眞幸福の人に非ずや、

之を要するにキリストの苦痛は時と場合とに由て起れる水面の波動  
 なり、キリストの幸福は永久變るとかくして、時々刻々未だ曾て間斷あ  
 ることなし、即ちこれ大風怒濤の下尙は閑々徐々として流通する大潮  
 の如し、故に曰く若しキリストの十字架と苦痛とは以て神の愛を示す  
 ものたらばキリストの平康と幸福とはこれ神の心底を現ははすもの

基督教は  
幸福の道  
なり

なりと、

キリストの道は幸福の道なり、キリストに従ひ其心を學び得て以て世に立つは即ち圓滿の幸福を得ること也、神の愛心に一致し神の大計畫に服従し神と一躰となり神と共にあつて世に處るは是れ自らの心事と人物とを一新することなる耳ならず亦實に天地の表面と人世の眺望とを一新すること也、此新人物の眼光の前には悲哀罪惡災害苦痛は單に太陽の班點たらん耳、見よ凡てのこと新たになれり、新らしき天と新しき地と先づ主觀的に此人物の心中に成れり、其終に客觀的に宇内に成就せんこと期して待つ可き也、嗚呼厭世主義は決して天地の真相を穿ちたるの説に非ず、愛に居る者のみ能く神を知り且つ造化の秘義を知る、造化の秘義はこれ正義なり真理なり仁愛なり圓滿の幸福あり、キリスト先づ此を知る、次にキリストに屬するもの之を知る、天下億兆の

人來つて之を知れよ、

### 第七章 キリストの人物(四)その謙卑自捐

凡て勞れたる者また重きを負へる者は我に來れ、我なんぢらを息えせん、我は心柔和にして謙遜者ふれば我軛を負ふて我に學べ、キリストの自負

謙卑と自負とは相矛盾せず

謙卑と自負とは必ずしも相矛盾するものにあらず、其身分不相應に、事の眞實に違ふて、自負自信するものは素より同時に謙卑なるを得可らずと雖も、元來謙卑の事たるや上にある處の人が下に在る者に對して謙るの謂なれば、其身眞に他人に立優るものにして始めて謙卑の美德を見るを得べき也、今イエス、キリストの生涯を見るに其自ら負ふ處のもの、實に高く其自ら信ずる處のもの、實に深きを見るなり、曰く我は世の光なり、曰く我の世の救主なり、曰く爾曹全心全力を盡して我を愛す可し、曰く神と我とは一なりと、然れども其の世人に接するを見れば少

しも自らを高ぶるの風なく常に自らを以て僕奴に比し、人類に給事して爲めに一命を棄つるを以て己れの分とす、或はサマリヤ邑の一賤婦と野邊の井頭に道を談じ、或は欣々然として税吏罪人を友とし、或は人の諸病諸患を憐みその憂苦を身に躰して之を救ひ、唯た善事をのみなして世を渡れり、自己の天職と權能との如きは總て之を忘却するものに似たり、宛も名花の春風に向つて伐らざる如く、無心虚意、唯た善をなすを知つて他を知らざる者也、曾て其弟子を教へて爾曹もし善をなさば其右の手のなす處は之を左の手に知らしむる勿れと云ひしは蓋し自己畢生の心事を表白せるものと謂ふべき也。

「人の子は失はれたる者を求めて之を救はん爲めに世に來れり、凡て勞れたる者重きを負へる者は我に來れ、我は爾曹の中にあつて僕の如し、」

「世の最と少なき者の一人に向つて善をなすは即ち我にあす也、」人の子

救世主は  
人間の奴  
隷なり

眞正の謙  
讓

の來るは人を役ふ爲には非ず、反つて人に役はれ又おほくの人に代つて生命を予へ其贖とならん爲めあり、此の最と少なきもの、一人だに亡ぶるは我父の聖旨に非ず、此等は常にキリストの口より落ちし金玉の言中其一二のみ、看るべしキリストの謙卑は即ち己れの尊嚴を空らし、唯た人を愛憐するの一念に由りて生涯を貫徹するに在りしを、イエスまた弟子に教へて曰はく異邦の領主はその民を主どり大人どもは彼等の上に權を操る此れ爾曹が知る處なり、然れど爾曹の中にては然す可らず、爾曹の中大ならんと欲ふ者は爾曹の僕となるべしと、其意に曰く眞正の尊嚴は己れの尊嚴を忘るゝにあり、眞正の權威は己れの權威を思はざるにあり、眞正の名譽は己れの名譽を知らざるにありと、而してキリスト自ら實に之を踐行せり、又曾て弟子等互に其先を争ふを見て宴會の席上自ら坐を去り僕の位置に就き一々其十二使徒

の足を洗へり、而して之に教へて曰く爾曹は我を呼び師と云ひ又主と云ふ、我は實に是れなり、我は爾曹の主あるに猶ほ爾曹の足を洗ふ爾曹また互ひに足を洗ふべしと、誰か之を讀むもの白刃膚を刺さるゝの思ひなからん、余輩は歐米にある真正の基督教徒の間にあつて上下相和し、智愚相伴ひ、一種言ふ可らざる謙讓の美風あるを見て怪しまざる也、

世の痛苦  
を醫すべ  
き膏油

嗚呼世の痛苦不平を醫すべき膏油は唯其れ謙卑の徳にあるかな、智者は愚人に謙り、富者は貧民に謙り、位ある者は位なき者に謙り、老ひたる者は幼なき者に謙り、即ち世人がキリストの謙卑を學び得るに至つて始めて平和と幸福とは此の世に来るべき也、凡て勞れたる者重さを負へる者よ、來れ、キリストに來つて其謙遜柔和なる心を學んで以て平和と永生とを得よ、

### 第八章 神に關するキリストの意識

未だ神を見し人あらず、唯だうみ給へる獨子す、父は父の體に在るもの、  
み之を影はせり 使徒 一〇、ハ子

如何せば  
神を見る  
を得ん

如何にせば神を見ることを得べきやとは人の尤も苦心する問題なりとす、イエス世に出て教へ一言以て之を解釋して曰く心の清きもの  
は福なり、蓋は神を見ることを得可ければなりと、蓋しこれ其生來一點  
の罪惡なく、其潔淨は氷雪の如く其仁愛は烈火の如く、以て自ら其心中  
に常に洋々として神明の充盈せしことを實驗せしが故に非ずや、若し  
此一言は仙境の泉の如く清淨なりとせばこれ豈に磐石の如きキリス  
トの品性より湧き出でしが故に非ざらんや、  
イエス又曰く子の外に父を知るものあしと、(太十一〇廿七)獨逸の極端  
なる批評的學者ハウスラット氏さへイエスのこの言は以てイエスの



イエス生  
れて罪ふ  
し故に能  
く神を知  
る

心に一點の罪なくして全く上帝の正義仁愛を反映せしことを證明するに足れりと云へり、豈に温良優柔なるナザレの豫言者の此一言は即ち彼が神に關して有せし知識の眞實を保證するものにあらざらんや、然ればキリストの中に此の特別無類の知識ありしなり、他の人間は唯神の活働の結果たる現象の表面を見る、其裏面の眞相を云ふに至つては僅に假説想像説たるに過ぎざる耳、

此の故に或は曰く神あるを、或は曰く万有はこれ神なりと、或は曰く神の有無は得て知る可らずと、或は論理を以て之を證明せんとし、或は適例を以て之を説明せんとす、然れども紛々たる諸説これバベルの多言のみ、之を聞くもの愈聞いて愈惑ふ、獨りナザレのイエスは人性の完全を備へ神子の理想に居れり、彼に在つて神と人と全く一致親和せり、イエスは即ち孝順の子なり、生涯の間秋毫だも神旨に悖りしことなし、

神は即ち親愛の父あり、一時一刻だもキリストの心を離れざりき、キリストが吾人人類の理想たる所以のものは、單に彼が人に對するの心事行爲の完全あるとにわらずして、亦實に彼が 人に對するの一致親和に在ると謂はざる可らず、

神人一體  
毫釐不違

イエス常に語つて神を指し我父と云へり、即ち我父の旨をなすもの(太七〇廿一)我父の前にかれを知ると云はん、(十〇卅二)我父の植ゑざる樹は抜かるべし、(十五〇十三)我父に恵まる者よ、(廿五〇卅四)我父は今に至るまで働さ給ふ、(約五〇十七)我父の旨をなす、(五〇十七)我父と偕にありて見しこと、(八〇廿八)我父われを愛す、(十〇十七)我父は農夫なり、(十五〇一)その他枚擧に違わらず、若し誰にても注意して福音書を讀まばキリストが神に對して特別異類なる和親愛睦の情を懷き給ひしことを感せざるを得ざる可し、

イエス生涯の間その心情と企畫とを洞開して相語るを得るの友は一  
 人だも有らざりしなり、イエスの弟子等は其數多からざるに非ず、然れ  
 ども其中一人としてイエスと同情同心して大業を助け得るものはあ  
 らざりし也、獨り神あり常にイエスの心に住み給へり、イエス亦其の心  
 を悉く開放して神と和親契合し給へり、即ち其捕はるゝ直き前にも弟  
 子等に告げて云へり爾曹みな今夜われを離れ去るべし然れども我ひ  
 どり在るに非ず、父われと共に在ればなりと又或る時は弟子等に告げ  
 て曰へり我と我父とは一なりと、

イエスを  
 見る者即  
 ち神を見

嗚呼イエスの情感心思全く神と一致す故に其爲す處は即ち父の事に  
 て、其言ふ處は即ち父の言ありしなり、ピリポ曾てイエスに問ふて曰主  
 よ我等に父を顯はし給へ然らば足れり、イエス答へて曰くピリポ我斯  
 く久しく爾曹と偕にありしに未だ我を知らざるか、我を見しものは父

を見しなり、何ぞ我に父を顯はせと謂ふやと、パウロ曰くそれ神の充足  
 れる徳は悉く形骸をなしてキリストに住めりと、(西二〇九)古今万國の  
 基督教會は曰く神、肉躰となりて我儕の中に寓れりと、蓋し甚だ當然の  
 解釋と謂はざるべからず、

然れば吾人はキリスト、イエスに於て完全の人性を見るのみならず、亦  
 實に神の發現を見るなり、茫茫漠々として人智の探り知る能はざる神  
 性の秘密はキリストに在りて發表顯現せり、吾人はキリストを通じて、  
 始めて天に在します、我儕の父よと祈るを得るあり、

第九章 キリストの十字架

一粒の麥もし地に落ちて死ふすば實を結ぶと能はず、若し死ふば多くの實  
 を結ぶべし、此理豈に獨り動植物界に限らんや、母の痛苦は即ち兒が生る  
 所以あり、又人生の幸福、國家の昌盛、一として其爲めに犠牲をさふりし人々の

徳に由らすんはあらず、

ロベルトソン

イエスの  
十字架は  
自然の終  
局

ナザレのイエスがガルバリ丘上十字架に釘せられ給ひしは自ら人の爲めに死なんことを希ひ、強ひて敵人の心を荒立て、以て成就し給ひしものに非ず、又神がイエスの十字架の死を成就せんが爲に強て奇跡的に事變の成行を支配し給ひしが故に非ず、余輩の見る處に由ればキリストの十字架はキリストの生涯と其境遇との衝突より生じたる極めて自然的に出来たる事件ありと思はる、蓋し當時のユダヤ人民の中にありて、ナザレのイエスが執り給ひし主義に従ひ、その行ひ給ひし如きことを行ひ、其言ひ給ひし如きことを言ふものあらば、假令其名はイエスと稱するも何と稱するも、終に十字架の死に遭はざるを得ざるべく、十字架の死はこれ必ずその生涯の論理的の結局たらんのみ、夫れ然り而して其然るが故にキリストの十字架は實に吾人を罪惡の

十字架は  
能く吾人  
の罪惡を  
潔む

中より救ふの力あるもの也、キリストの十字架は苦痛の標號に非ずして寧ろ愛憐の標號、同情の標號と謂ふ可き也、之を苦痛の量よりして言は、或は世にはキリストよりも多くの苦痛を受けたるものなきにしも非ざる可し、然れども人を愛し、敵を愛し、憐憫同情を以て世人の罪惡と悲哀とを己が身に體恤するもの未だ曾てキリストの如きものあらず、又た是より後と雖も之ある可らざる也、而してイエスの十字架は實に此心の發表にしてその最良の標號あり、往古使徒パウロをして余はキリストとその十字架の外には何をも知るまじと心を定めたりと叫ばしめし所以のもの實に此の故に由るに非ずや、蓋し世には同情愛憐より強大あるものあることあり、嚴父の誠は以て放蕩子の心を改むるに足らざるに際して、慈母の涙滴は以てよく彼の心を翻へして正善に立歸らしむるを得るなり、ギリシヤの哲學、ローマの法律、ユダヤの宗教は

當時の人心を一新する能はざるに際しキリストの十字架は救世の旗  
 號となれり、而して此旗の向ふ處天下に敵なく、遂に歐洲全土を風靡せ  
 り、佛教の哲理、儒教の道學甚だ善美ならざるには非ず、然れども其大亞  
 洲に行はるゝや、茲に二千有餘歳而して人心は日に益々微し、月に益卑  
 屈して罪惡と悲哀の深淵に沈淪せんとす、此時に當り此幾億萬の民を  
 救ふて正義と希望と永生の民たらしめんには獨りキリストの十字架  
 の大能に依らずんばある可らず、余輩は自ら心に實驗してキリストの  
 十字架の力を知る、故に往古の使徒等と共に此外復た別に救あること  
 なしと明言するを躊躇せざる也。

贖罪の諸  
 説一も滿  
 足あるも  
 の有らず

若しキリストの十字架は神の義心を満足し神の憤怒を挽回して以て  
 人を救ふものなりと云はゞ余輩は未だ其意を解するを得ずと答へざ  
 るを得ざる也、蓋し論者の所謂神の義心は罪人の罰を要求するものな

るべければ罪人の罰せられてこそ始めて満足するを得べけれ、一點の  
 罪なきキリストが人に代つて天罪を受けしとて何で満足するの理あ  
 らんや、余輩は此神學説に於て極めて粗野なる野蠻時代の正義に關す  
 る思想の發表を見るのみ、若し又キリストの十字架は神が宇宙に於て  
 施行せる政治を維持して以て人を救ふものなりと云はゞ余輩復た未  
 だ其意を解する能はざる也、蓋し論者の意を察するにこれ神はキリス  
 トの十字架を以て罪の惡むべきことと罪惡に付て彼自ら如何の苦痛  
 をおし給へるかを示し以て、假令罪人を赦るして之を救ふあるも、彼の  
 未だ曾て罪を犯せしことなき天使等をして不平を鳴さしめず又怠慢  
 の心を起さしめざるやう、大に戒めんとするものなりとす、余輩は此神  
 學説を評して云はん、これキリストの死を以て寧ろ人間の爲めにせず  
 して天使の爲めになせしものありとなし且つキリストの苦痛を以て

十字架は  
仁愛の發  
現なり

演劇的の所業とあすものありと。

然りと雖ももし余輩が既に説明せし如く十字架を以て其  
愛憐の發表となす時には、余輩は之を以て十字架の生涯の至當の結  
局と思惟せざるを得ざる也、蓋し十字架の生涯は即ち隠れたる十字  
架にして其死は即ち此の心を發顯したるのみ、神の獨生子たるイエス  
は人間を愛し之を救はん爲めに其生命を棄てたり、吾人は此のイエス  
を信じ之と合躰同化して始めて罪より離れ神と和むを得るあり、夫れ  
人類は罪惡の束縛に困められて自ら如何の工夫を回らすも又如何の  
奮起力行する處あるも之を脱すること能はず、獨り十字架と其十字  
架のみ能く吾人を自由にす、之を譬へば吾人は猶ほ金錢を以て買買せ  
らるゝ奴隸の如し、十字架の十字架は即ち吾人を罪惡の所有より買  
得て而して自由ならしむる處の價金の如し、パウロが爾曹は價を以て

購はれたるものなりと言ふは蓋し此の意に外あらざる可し、  
嗚呼キリストの十字架を見て主よ我罪を赦し給へと叫ぶもの豈獨り  
十字架上の盜賊のみならんや、キリストの十字架を以て世に向へば世  
は十字架に釘けらる、我の世に向ふも亦然りと白狀するもの、豈獨り老  
パウロのみならんや、天下の億兆皆十字架の下に來り、其罪を哭き、而し  
て十字架の血を啜つて以て各自ら十字架を負ふの新人となるまでは  
此世界は平康の日を迎ふを得ざる可し、夫れ神は其生み給へる獨子を  
給ふ程に世の人を愛し給へり、蓋は凡て彼を信するものをして亡ぶる  
ことなくして窮りなき生命を得せしめんが爲め也、

## 第十章 キリストの超絶せる品性及ひ奇跡

ひさりの嬰兒われらの爲めに生れたり、我儕はひさりの子を與へられたり、  
政事はその肩にあり、其名は奇妙、また謙士、また大能の神、とこしへの父、平和

の君と稱へられん、

基督教の  
起原に關  
して何人  
も許容せ  
ざるを得  
ざる事實

夫これキリスト教の起原に關して如何なる極端ある學者も信認せざるを得ざる處の事件あり、試こころみに其中の二三を擧あげんにキリストの傳道は僅々三年に過ぎざりし事、キリストはガリラヤ湖邊の漁夫等を集めて弟子とせし事、當時の人民は世俗的の王國を建てんことを希望し、キリストは心靈的の王國を目的とし、其欲する處互に相協はず、爲めにキリストは遂に十字架に釘つられて死せし事、死して後數日を出ざる中に弟子等はキリストは死より蘇よみがへりしと信じ、非常なる勢を以てキリストを宣傳せし事、是に於て乎キリストの蘇生てふ信仰を基礎としての教會堅立せし事等、是なり、以上の數事件たるや、如何ある不信者と雖も、苟も新約書の何物たるを知り、歴史の何物たるを知る處の人たらば、之を信認せざるを得ざるべし、請ふ是より此數件を基礎として、聊かキリストの品

試みにキ  
リストハ  
奇跡を行  
はざりし  
と假定せ  
ん

性と奇蹟とを論せん、

今試みにキリストは奇跡を行ひしことなしと假定せん、然ればキリストの復活の如きは奇跡中の尤も大なるものにして、素より眞の事實となすべからず、キリストの復活とは即ちキリストの没後間もなく弟子等がキリストを眞の救主と信せし熱心の餘りに、夢幻の如くにして其心上に浮うかび出でたる信仰にして、又他の夥多の奇跡は後年に至りキリストを尊崇するの餘り、漸次に附會したる處の妄談なりとなさざる可らず、然れども若し果してキリストの復活及び其他の夥多の奇跡一二の癩癩患者を醫せしが如き、醫療奇跡を除くの外は、熱心妄想の結果ありとせば、是れ取りも直さずキリストが弟子等に與へし處の感動の實に巨大なりしことを告白するものに非ずや、即ちその感動は斯の如く熱心妄想を起す程に巨大なりしなり、然れど其感動の斯の如く大な

りしことは奇跡を否定する時には容易に説明し得べからざる也。  
 試みに思へ、弟子等がキリストに於ける、其恩義果して幾何ぞや、彼等は  
 僅々三年内外の短日月のはか(若し或懷疑的學者の如く第四福音記者  
 の告ぐる處を眞實とせざる時には僅かに一年半計を出でず)キリスト  
 に隨從せざりしあり、素と彼等がキリストに隨從し爲めに一切を棄て  
 顧みざりし所以のものは、キリストは世俗的の王國を建立し、ローマを討  
 伐し、全世界を征服し、仁義の政を行ふて以て萬民を安んずべしと信せ  
 しが故なり、彼等常に自ら勵まして曰へり、我師若し志を得ば我黨は大  
 臣の榮位に坐し、大權を握つて萬國の民を統治すべしと、今彼等の熱望  
 企圖は果して如何に成行しや、キリストの傳道中に人民の熱心非常に  
 激昂し、直ちに擁立して以て王とせんとせしこともありき、然れどもキ  
 リストは迂濶にも(當時弟子等の眼光より見ば)高尚なる眞理を説き大

弟子等何  
 故にキリ  
 ストを離  
 れざりし  
 や

衆の熱心を冷却して可惜好機會を失したり、又時としては名望學識あ  
 り、或は資産門地あるの人士訪ひ來つてその志望と企圖を叩きしこと  
 ありき、然れどもキリストは儼然として自家の主義を主張し、少しも彼  
 輩の熱望に假す處あらざりしかば遂に斯かる有力家の協同をば失ひ  
 たり、之と同時にキリストの聖潔なる教誨侃々たる譴責は權勢あるパ  
 リサイ宗徒の嫌惡する處となり、強敵の繞圍日々益甚しく、孤城落日遂  
 にカルバリ丘上の十字架の死とぞなり果てけり、弟子等がイエスの生  
 涯に付て失望落膽せしことは、十二弟子の一人なるイスカリオテのニ  
 ダが十七圓計の報酬を望みてイエスを敵の手に解し、ことを見ても  
 知らるゝなり、故に若し人情より云はば、弟子等は全たく失意落魄して  
 思ひくりにガリラヤの舊廬に歸り、再び漁夫の舊生涯に入り、キリスト  
 の教はカルバリ丘頭一片の雲煙と共に消失するに至りしや、豈亦疑を

容れんや、

然れども事の實際は大に之と反し弟子等はキリストは死して第三日に復活せりと云ふの確信を起し且其の在世中夥多しき奇跡を行ひしと信じて、此の十字架に釘られて死せし人を推奉して世の救主なりと主張したり、若し彼等は此が爲めに名譽利祿を得るの目的もありしならば、又或はその熱心は一時のみに止りしならば、これ彼等が負け惜み、瘦せ我慢の氣概を以て、世を籠絡せんとて故造せし談話なりと云ふを得べきも、其實彼等は始めより身命を犠牲に供し、キリストの爲に耻辱困厄を受るを榮となし、且その志は彼等の生涯中三十年若くは五十年の間、始終一日の如く一貫して少しも動くとなかりしなり、其證據には彼等が遺せし信仰の主動力は、尙二千歳後の今日に至り、將に全世界の人民を震動せんとするの勢あるを見るべし、左れば彼等の實にキリス

弟子等キリストの奇蹟を信じたりと論定せざる可らず

懐疑的論者の説明

トは夥多の奇蹟を行ひ且死より甦り、又十字架の死は正にこれ其救世主たる所以なりと確信せしに相違ある可らず、今彼等は果して如何なる理由により此確信を起せしや、若し之に答へて是れ弟子等が信せし通りイエスは實に奇跡を行ひ且つ死より甦へりしが故なりと云はば、誠に條理分明にして少しの遺憾ありしと雖も、若し此の分明なる答を以て満足せずして他に説明の法を求めんとすれば、困難百出殆んど一歩も進行し能はざるに至るべし、蓋し奇跡を否定する懐疑的論者は答へて云はん、復活の信仰はイエスが其言行により弟子等に與へし感動の實に深且大ありしが故に起れりと、即ち其意を説明せば、弟子等の豫ねてイエスを尊信することの非常なりしが故に、假令十字架の死は彼等の宿志に正反對し、且つ其尤も肯能はざる處たるに關はらず、遂に怨望の念を起さざりしなり、而して彼等イエスは死より復活すべしと熱



信待望せしが故に遂に第三日にイエスは復活せりと云ふの幻夢を見、且つ後年イエスを景望するの餘に色々の奇跡談をさへ附會するに至れりと云ふならん歟、然れども、試みに思へ先づ此の感動を興へし處の人は誰ぞ、ナザレ村木工の子、齡漸く三十計の人にして、其傳道せし年限は漸く二三年に過ぎざるのみ、次に此の感動を受けし處の弟子等は誰ぞ、ガリラヤ海濱の漁夫等にして、彼等は感情に鋭敏からざりしなり、又想像力に富まざりしなり、今この弟子等にして、彼のイエスの言行のみに由て如此の絶大なる感動を受けしと云ふは、豈自然界の出來事としてあるべきことならんや、故に奇跡を否定する人々は此の心理上出來可らざる事を信する者と謂はざる可らず、奇跡の事案より普通以外の事にして信し易からず、然れどもキリスト教の起原を考ふる時には吾人はキリストの非常絶倫なる品性と言行とに加へて、彼は亦奇跡を行

へりと信せざるを得ざる也、

之を約言すれば若しキリストの奇跡を否定せん乎、心理上ある可らざる事を眞實とせざる可らず、故に吾人は寧ろ奇跡を信するの條理分明なるに如かずと思ふあり、之に反して懷疑的論者は始めより奇跡ある可らずとして立論するものにして、其論理と意志との向ふ處是非に關はらず基督教の起原を自然的に説明せざる可らず、然れども歴史上の事實は遂に彼等の説明を聽さざるや明白なり、嗚呼世の懷疑的論者は信仰の舟を行るに當り、奇跡の高山を恐れて却て他の恐るべ暗礁に破船す、余輩は寧ろ此高山の麓に近づき船を良港に寄せて以て信仰の錨を下さん。

## 第十一章 キリストの復活

我は生者ふり、前に死にしこまあり、視よ我は世々窮りなく生きん

黙示録のキリスト

哥前十五  
章に於け  
るパウロ  
の証言

使徒パウロは哥林多前書十五章に於て、吾人に告て曰く、兄弟よ、前に我なんぢらに傳へし福音を今また爾曹に告ぐ、こは爾曹が受しところ、之に因て立ちし所あり、我なんぢらに傳へしは我が受し處の事にて、其第一は即ち聖書に應ひてキリスト我儕の罪のために死、また聖書に應ひて葬られ、第三日に甦り、ケバに現はれ、後十二の弟子に現はれ給へること也、如此あらはれ給へるのち、五百の兄弟の共に在るとき亦これに現はれ給へり、其兄弟のうち多くは今亦は世にあり、此後ヤコブに現はれ、又すべての使徒に現はれ、最後に月たらぬ者の如き我にも現はれ給へり、この故に我も彼等も此の如く宣傳へ、爾曹も亦かくの如く信せり、今このコリント書はパウロの書として世に信せらるゝものにして古

初代弟子  
等は實に  
復活を信

今の最も極端なる非福音主義の學者輩と雖も、一人として之を疑ふものはあらざるあり、且使徒パウロは素とキリスト教の敵にして殘酷なる迫害者の張本人なりしが、中途にしてその非行を覺り、翻然悔改してキリストの徒となり、爾後三十餘年の間キリストの爲めに絶大の精神を以て忠勤したる人にして、キリスト教會の創始に際して尤も興りて力ありし處の人なり、今彼の書翰を読み其志操意趣のありし處を知る者、誰かその心事の皓潔にして一にキリストを愛し人を愛するの純愛を以て充滿せしことを疑ふ者あらんや、ア、パウロハ決して世を欺きし姦雄の徒にあらす、自ら認めて以て誠實とせし事を滿幅の精神を以て天下に宣傳せし人なり、今この確實疑ふ可らざる處の書中にキリストの復活のことを明言するを以て見れば、これ實にパウロが宣傳せし福音の根據ありしこと明

白なり、又この誠實なるパウロにして、此事を宣傳せしに依て見れば、彼は自らキリストの復活を以て確實疑ふべからざる處の事實となせしや明白なり、獨りパウロ自身に付て之を云ふ可き耳ならず、亦數年パウロに先だつてキリストに事へし處の弟子等も、全しくキリストの復活を信じ、且之を以て其福音の根據となせしに相違なきなり、何とあればパウロの悔改と信仰はペテロ、ヨハネ、ステパノの徒の信仰ありて、初めて説明し得らるゝ者あれば也、況んやパウロは其生涯の禍福に、大關係ある信仰上の變化を成さんとするに際して此の緊要なる大事伴を詳細調査せずして信用するの理由あらざるに於てをや、然ればパウロも他の弟子等も誠實にキリストは死より甦りしと信じ、この信仰に基づきてキリストの教會を起したるや疑ふ可らず、

以上論ずる處の事は、余輩の私見に非ずして、實に各派の學者輩が皆悉

く承諾する處の事實なりとす、パウロ、ストラウス二氏は近世批評家中の泰斗なるが二氏共に使徒等は正直誠意に道を宣傳せしものにして、決して世を籠絡せんが爲めに、キリスト復活の談を故造せし者に非ずと明言せり、パウロ曰く歴史の弟子等がキリストの復活を確實疑ふ可らざる處の事實となして信せしとを證明するあり、ストラウス曰く歴史家は弟子等は確かにイエスは死より甦りしと信せしと云ふことを承諾せざる可らずと又曰く使徒パウロがペテロ、ヤコブ及び其他の使徒等の口より直ちに彼等及び五百人の兄弟等は皆イエスが死にし後ち復た活きたるを見しと確信せることを聞きしと云ふ事は吾人が疑ふ可らざる處の事實なりと、

蓋し當時の情勢たる始め弟子等が一切を捨てイエスに従ひ世の是非を顧みざりし所以のものは他なし、職としてイエスの此世に於て王國

弟子等を  
して興起  
せしめし  
は復活の  
信仰なり

を起し、彼れ弟子輩を以てその大臣たらしむべしと熱信せしに由らず  
んばあらず、然れども事實は全く此希望に反してイエスは僅々三年の  
傳道を以て事終れりとなして、終に十字架に釘られて世を去れり、於  
此乎弟子等は豈絶望せざらんと欲すと雖も得んや、然るにその死後の  
事實は全く之と相反し、彼等はキリストが十字架に死せるの後、間もな  
くして非常の勇氣と精神を振起し、生命と一切を犠牲にして以て道を  
傳へたり、之によつて世の教主にして十字架に釘らると云ふことは、當  
時智人の冷笑する處、愚人の信用し得ざる處なりしに係はらず、其道は  
エルサレムを始めとして四方に廣布し、三十年を出ざる中にローマの天  
下到る處信徒あらざるの地なきに至れり、是果して何による乎、只一に  
キリストが死より甦りて弟子等に現はれたりと云ふの確信にありと  
す、余輩を以て之を見れば、單に弟子等は實にキリストの復活を信せし

とあすべき耳あらず、亦キリストは實に死より甦りて以て其弟子等に  
顯現せりとなさざるべからず、世の懐疑的論者は何等なる論鋒を以  
て此確實ある歴史上の事實を説破せんと欲するも、決して説破し能は  
ざるべし、吾人は此確信の上に信仰の生命を置きて以て、今後我邦傳道  
の大業に當らざる可らず、

### 第十二章 キリストの復活に關する

#### 懷疑説(一)閉息説

彼等ゴルゴタ譯けは即ち「されかうべ」と云へる處に來りイエスを十字架に  
釘く畫の十二時より三時に至るまで其地あまれく黑暗とある、イエス大聲  
に呼はりて氣絶へたり、  
日暮れてイエスの弟子あるヨセフと云へるアリマタヤの富める人來りて  
ピラトに往きイエスの屍を請ひしかばピラトの屍を付せと命ず、ヨセフ  
屍を取りて深き泉布に裹み之を磐に鑿りたる己が新らしき墓におき大なる  
石を墓の門に轉ばして去る、  
大廿七〇三十三—六十

弟子等が故意に作爲してキリスト復活の談を世に宣傳せしと云ふことは事實に相違するものにして、彼等が誠實にキリストは死より蘇りたりと信じたることは疑ふ可らざるの事實なりとす、此信仰ありて彼等はるの精神を鼓舞され、且キリスト教會は世に起りたり、去れば弟子等が擧つてキリストの復活を信じたることあればキリストは實に甦りしに相違ありしと議論一決すべしと思はるれども、世の反對論者は中容易に服するの色なし、弟子等がキリストの復活を信せしとて強ちこれを實事とするに足らず、必ずや別に説明の道あるべしとて色々の説明を試みたり、

第一、或る學者は疑ふて曰く、弟子等が見て以て復活となせしは、これ眞に死より甦りしに非ずして、閉息より回生せしものならん、其理由とする處を聞くに、曰くキリストは僅かに六時間十字架に懸れり、普通の

イエス實  
に死せし  
に非ず

事なれば二三日も経ざれば死するとなし、兵卒等來りし時、キリストの兩側にありし盜賊は尙ほ生命あるを見て其足を折て之を殺せり、然れどもキリストはすでに息絶へければ足の骨を折らざりしとあり、於茲乎キリストは死せりとして墓中に置かれたりしが、墓は洞窟にしてその中多少の空氣あれば、其葬式の時に用ひし香料の薫香により、キリストは間もなく回生し再び元氣を鼓して弟子等に面會せしならん云々、余輩之に答へて云はん、キリストは十字架に釘らるゝ前、すでに其心身共に非常の苦みを受けたり、ゲツセマニ園に於ける前夜の苦みは、死ねばかりなりと自ら明言せし程なり、ピラトの裁判を受けて後、ローマ法廷に於て恐るべき杖打の刑を受けたり、其體力既に衰へ果て、十字架を負ひ行くことさへ能はざるに至れり、十字架に釘らるゝに當つてや、キリストの手足は大なる釘を以て打付られて血は淋漓として迸流し、六

イエス實に死れり

時間炎天に曝らされて渴氣堪ふ可らず、これらの爲めに息全く絶へて死せり、三福音書に「主よ我靈を爾に托す」と云ふて死せりと記さる、又第四福音書によれば、ローマの一兵卒は槍を以てキリストの脇を刺せりとあり、聖書の記す處によれば、キリストは眞に死せしこと決して疑ふ可らず、

然れども論者は勝手次第に聖書を取捨するの弊あれば、或は言はん、一兵卒が槍を以て脇を刺せしことは信するに足らず、又我靈を爾に托すと云ひ大息を吐きて死せしと云ふは信するに足らず、キリストは僅かに閉息せし耳にして、未だ死に至りしに非ずと、一任余輩は茲に一步を譲りて、キリストは僅かに閉息せりと假定せん、然れども彼は普通の人の閉息と違つて、已でに一兩日前以來の心身の苦勞と、當日ローマ法廷の杖刑と、之に加ふるに十字架上の出血と渴氣と六時間の苦みとによつ

て、其身は非常に衰弱せしとせざる可らず、之を醫術に明なる今日の事として、而して十字架より取り下して後ち直ちに名醫の治療を受けたりとせば、或は再び回生し數月の後には元の健康に復することもやあらん、然れどもキリストの事に至つて事情の大に之に異なるものあり、彼は死せりとして十字架より取下し、直ちに大急ぎに墓中に埋めたるにて、素より名醫の治療を受けしに非ず、且つ洞窟の中冷濕窮陰満ち健康の人さへ病ましむるに足る、奚ぞ大衰弱人を回生するの力あらんや、且又キリストの如く体力衰亡せし人が、万一回復するとも數月の後なら、ではとても健全に復す可らず、然るにキリストは此墓に入られて、間もなく回生し、自ら大石を排除して出で來り、弟子等に面會し、數十里を隔つるカリヤ迄歩行し、今コ、にあるかと思へば忽然として他處にあり、其状態の健氣なる、其運動の活潑なる、弟子等をしてキリストは

實に死より甦りたりと信せしめたりとなすはこれ豈解し難きの至りに  
あらずや、故にストラオスの如き、極端なる論者と雖も此説を執らず  
して左の如く論じたり、曰く半ば死せし處の人が自ら墓中より其疲勞  
衰弱のまゝに匍出て、而して其手足の痲は尙ほ未だ痊へずして常に醫  
者の親切なる治療を受けざるを得ざる程なるに――斯の如き人が其  
弟子等の心頭に、自己は死と墓とに打ち勝ちたる者、生命の王ありとの  
感覺を起し得べき乎、蓋しこの感覺は弟子等が後年に至る迄常に活潑  
なる運動をあして止まざりしことの源泉ありしなり、余を以て之を見  
れば斯の如くして生に復することは番だに弟子等の愁傷を變じて熱  
心となし、尊敬を化して崇拜となすこと能はざりし耳ならず、却て曾つ  
てその生涯と死とによつて弟子等に與へたる敬畏の感覺をも弱くす  
るより外なかりしならん、

### 第十三章

### キリストの復活に關する

#### 懷疑説(二)幻夢説

イエス進みて彼等に語り云ひけるは天の中、地の上の凡ての權を我に賜れ  
り、此の故に爾曹ゆきて萬國の民にマテスマを施し之を父と子と、聖靈の  
名に入れて弟子とし、且わが凡て爾曹に命ぜし事を守れと彼等に教へよ夫  
れわれは世の末までも常に爾曹と偕にあるなり、

太廿八〇十八―二十

二、幻夢説、余輩は前章に於て閉息説の以てキリスト顯現の事實を説  
明するに足らざることを論究したり、之に次ぎて現はれ出づる處の反  
對論は幻夢説これなり、其説に曰く、キリストの復活を見たりと信せし  
もの、中にて第一あるものはマグダラのマリヤあり、而して彼がイエ  
スを見たりと信せし場所はキリストの墓邊なりし也、抑もこのマリヤ  
は素と神經性の患者なりき、曾てキリストに醫されて健全に復したり

と見えしが、今また其病再發してイエスを見たりと信じたるなり、而してこの神經病は單たにマリヤにのみ限らずして次第に他の初代弟子等の仲間に感染し、遂に一種の流行症となれり、殊に弟子等がエマヤよりカリヤに歸りし後に、前日キリストと共に往來せし處の地に到り見て、轉た懷舊の思ひに堪へず、キリストの事を思ひ出す毎にキリストを見るの感覺を起せしならん、故に彼等は到る處にキリストを見たり、山の頂きに於て、海の涓に於て、路の傍に於て、何の處に於てもキリストを見たり、是に於て乎キリストは死より甦りたりと云ふの信仰益堅固なるに至れり、使徒パウロがダマスコに到らんとするの途中キリストを見たりと信せしもこれと同一の理なり、彼は實にキリストはるの目前に顯現せりと信せり、然れども其實はこれ只彼が心裡の幻像に過ぎざりしのみと、今余輩は之に答へて云はん、

必用ある  
事情と時  
間とを欠

(第一)幻夢説に必用ある事情と時間の無かりしこと、事情とは何ぞやイエスは死より甦るあらんと云ふの熱望これあり、幻夢説の論者は曰く弟子等はこの熱望あり、寐ても寤てもこの熱望を以て思を満たし、殊に集會して互にその胸襟を打開きて談せし時には、この熱望は炎々として燃え上りしならん、キリストは甦るならんとの熱望變じて甦るべしと云ふの信仰となり、再變して既に甦れり、某々に現はれたり、今こゝに我儕の目前にありと云ふの喜悅となれりと、必用なる事情とは即ちこれあり、然るに當時の有様を見るに、事情の之と正反對なるものあり、素と弟子等が一切を捨て万人に先んじてキリストに従ひしは、他なしキリストは世俗的の王國を建立すべしと信じ其志の成就するに於ては、皆各相應の報酬を受くべしと希望したるなり、然るにキリストの十字架の鉄槌の如く一撃の下にこの空中の樓閣を破碎し盡せり、弟子等



の只、失望、落膽、恥を、忍び、憾を、呑み、頭を、俯し、尾を、垂れて、再び、その、故山に、かへるの、一事ありし、耳、何ぞまた、絶大の、希望を、抱き、熱上の、餘り、キリストの、顯現を、夢みるを得んや、其と云ふも、一人二人の、とならば、或は、然らん、然れども、十一人の、弟子、悉く、この、信仰を、起し、而して、遂に、五百人の、者亦一同に、この、信仰を、起すに、至らんこと、哥前十五〇六は、豈に、信じ難きの、至からずや、又、幻夢説に、猶一つ、必用なるものは、時間なり、キリストの、死と、顯現との、間に、熱望の、十分に、燃え立つまでに、適當の、時間なかる可らず、然るに、事實は、これに、反し、弟子等が、イエスの、顯現を見しことは、第三日に、あり、されも、十分の、三晝夜に、あらずして、實は、僅かに、一日、二夜、たりし、耳、パウロの、書翰使徒行傳四福音書皆同じく、幾十回となく、第三日に、甦り云々と、主張す、若し、幻夢説をして、眞なりとせば、この、一日二夜の中に、弟子等は、十分なる、理由の、あらざるに、失望、落膽の、地獄より、一躍し

て、希望、熱上の、天國に、上れりとなさざるを得ず、豈に、此理あらんや、

(第二)弟子等が、イエスは、死より甦りたりと、信せしことは、これ、彼等が、一身の、方向を、確定し、且、共同して、世に、打つて、出で、キリスト教の、大運動を、起せしこと、の、起原なりとす、看よ、彼等は何等の、犠牲心を、以て、福音を、宣傳し、何等の、深慮を、以て、創業の、基を、置しきや、キリストの、十字架は、ユダヤ人の、躓く處、その、復活は、ギリシヤ人の、嘲弄する處、たるに、關はらず、彼等は、この、信仰を、抱持して、全天下に、周遊し、遂に、其道を、以て、當時の、文明國たる、ギリシヤ、ローマを、征服せし、耳ならず、その、創起せし、宗教的、道徳の、革命、大運動は、二千載の、今日迄も、猶ほ、その、速力を、失はずして、將さに、全世界に、波及せんとす、弟子等、一夜の、夢、一朝の、幻、豈この、大運動を、起すの、力あらんや、

(第三)故に、懷疑的論者中、或る人々は、説をなして曰く、キリストの、弟子等

論者窮し  
て不可識  
説を取る

ワイツセ  
ロツエカ  
イム等の  
説明

は實にキリストは死より甦りたりと信じたり、この信仰によつてキリストの教會は創立せられたり、然れどもこの信仰の如何にして起りしやに至つては後世人の興り知る處にあらざると、有名なるパウエル氏は吾人の稱して以て復活となす事件に關しては實際如何なる出來事のありしやは歴史的穿鑿の及ぶ限にあらざると云へり、然れどもこれ争論の最要點を避るの遁辭にあらざして何ぞや、其困窮思ふ可き耳さればにや有名なる哲學者ワイツセ氏ロツエ氏の如きもキリストの復活に關して説をなして曰へり、此際に於て何事か驚くべきとの起りしには相違なし、此れ或はイエスが其靈を以て弟子等に顯現し其の確かに尙ほ存在して弟子等と偕に在ることを證明せしものならん、有名なるキリスト一代記の著者たるテオドール、カイム氏は福音主義の味方に非ず、彼れ第四福音書の正作を否定し、三福音書中奇跡を排斥し、論じて終

にキリストの復活の事に及ぶや、辨論滔々先づ非復活説を述べ、之を讀むや吾人信徒をして膽冷へ膚粟を生せしむ、然れども氏は語を繼ぎて曰く余や公平に十分に非復活説の理由を説明したり、然れども余は未だ之に服する能はざるものありとて、更らに滿幅の精神を奮つて非復活説の無道理なるを辨じ其根據を悉く破碎して餘す處なし、而して其自ら執る處の復活の説明如何と云ふにキリストは其靈を以て客觀的に實在的に弟子等の心に顯現し給ひしならん、と云ふに在り、今夫れ復活の説明に付てはワイツセ氏ロツエ氏カイム氏等の説く處或は批評を免る可らざるべし、と雖も其復活を以て實事となして幻夢説その他非復活説に反對することは一なり、以て非復活諸説の遂に立ち難きと知るべき也、

斯の如き理由なるに由り吾人は憚らずしてキリストの復活を信せん

と欲す、その如何なる有様にして復活し、弟子等に現はれ給ひしかは一の難問にして容易に論定す可らず、或は肉體を以て復活せりと謂ふを得可し、又或は靈軀を以て復活せりと謂を得べし、兩説何れも困難あり又一理あきに非ず、只だ尤も必用の一點はキリストの働きは十字架を以て終らずして、彼は人類の首領、教會の主宰として、永遠に吾人と偕に在り給ふことを信ずることに在り、吾人は單に福音書記録を讀んでキリストの言行を學び、完全なる人物を記念するを以て止む可らず、宜しく聖靈によりて、キリストの實在を信じろの精神に沐浴し、其大能の手に導かれて救ひを全うす可きなり。

### 第十四章

### 聖靈の恩化及びキリスト

### 信徒の意識

基督教は、正統の主旨に従つて解釋せば、抽象的に或る教理を信諾するこ

とに非ずして、活潑々地の神人物を吾人に示して之と合體同化せしむること即ち是あり、別語を以て再言せば、一たび罪惡の故によつて分離したる處の人性が元の如く神に歸一することに於て、其方法たるや教訓をふすと、よりも寧ろ新らしき生命を賦與するに在り、

グラツドストン

基督教と  
他教との  
區別

基督教と他の宗教との區別は何ぞや、一言以て之を説明するを得べし、曰く基督教は救拯の道、他教は修養の道なりと云ふ是なり、蓋し基督教徒は自ら勉るを以て足れりとせずして切に天を仰ぎて其救助を求む、他の教徒は否らず單に自ら省みて勉むるを以て足れりとせず、故に基督教は天より出で、地に屬す、他の教は地より出で、地に屬す、

余輩は他教を目して邪教となすものに非ず、凡ての人を照らす真正の光はソクラット、釋氏、孔子の心に照り輝きしことを信するもの也、故に他教中の眞理は喜んで之を是認し、其人類上進の爲めに奏せし功績は喜んで之を稱揚せんとす、雖然余輩はキリストの教中、其重要なる性質

イエスの  
在世中に  
弟子等が  
受けし感  
化大なり  
と雖も未  
だ以て弟  
子等人物  
の變化を  
説明す可  
らず

として、茲に他の凡ての教と異なる者あるを見る、即ち聖靈の恩化是なり、蓋し基督教の基督教たる所以は單に人間の前に理想的のキリストを揭示し、人をして其模範に倣はしめんとする耳にあらざりて、亦神の聖靈は常に人と偕にあつて人の善志を助くと云ふにありとす、即ちキリスト世を去るの前夜弟子等に告げて我なんぢらを棄て、孤兒とせず、再び爾曹に臨らんと云ひ玉ひしことにあるなり、  
試に思へキリスト在生の時弟子等が彼より受し處の感化如何に大なりしかを、彼等の窮する時は則ちキリストに行く、彼等の惑ふ時は則ちキリストに行く、彼等の憂ふる時、悲める時、恐るゝ時、失望する時、何時も彼等はキリストに行けり、而して常に満足ある教と助を受くるを得たり、キリストと寢食を共にし、成敗を共にし、身を彼に一任して躊躇する處なかりき、看よ僅々三年の交親以て十分なりと云ふ可らず、然せも此

聖靈の恩  
化

後幾何もなくしてガリラヤの漁者農夫等は一變して世界の教導者となれり、此れ果して何の力に由て然る乎、余輩の之を聖靈の恩化に歸せざる可らず、我なんぢらを棄て孤兒とせず、再び爾曹に臨らんとは、則ち三年の間我なんぢと偕に肉體を以てありし如く、今後永遠に聖靈を以て偕なるべしとの約束に外ならざる也、一は肉體のキリスト而して僅僅三年の短日月耳、一は靈界のキリスト而して永遠窮なく偕にあるべしと、而して其人と偕にあつて教を與へ、助を與ふるに於ては前後相違あるを見ざるなり、故に希伯來書に曰く、我儕に雲霧を通りて昇りし大なる祭司の長、すあひち神の子イエスあり、故に我儕信する處の教を固く持つべし、蓋われらが荏弱を體恤こと能はざる祭司の長は我儕に有す、彼は凡ての事に我儕の如く誘はれたれど罪を犯さざりき、是故に我儕恤みをうけ機に合ふ助となる恩恵を受けん爲めに憚らずして恩寵

の座に来るべしと蓋し最初の弟子が肉體のキリストに於ける如く、万世の信徒は靈榮のキリストに親炙し、其聖靈の助を受くべきを云ふなり、

キリスト  
と偈ふる  
の意識

パウロがキリストと云ふ時には單に天外の一方に端坐せる存在者を指さずして、亦活々潑々として各信徒の心胸に充滿するキリストを云ふ、彼が神の恩寵と云ふ時には悠遠窮りなき宇宙の中心にある神の心を指さずして各信徒の心に充滿する恩寵を云ふなり、眞のキリスト信徒に取つては神はキリストと偈にその心に住み、之を指導し其生涯を統率ゆと云ふことは尤も確實なる知識なり、其心にはキリストあり、聖靈あり神あり、正義と平和と喜悅は其心に滿つ、之を前日の神なく望なく、幸福なくして、世に生存せし有様に比すれば宛もアフリカの遠征者スタンリ氏がコンゴウ地方の深林に入り陰々鬱々く一百六十日の間殆

んど天日を見ずして五百哩程を進行し、後忽ち大湖の畔に到れば渺々たる大原の青々として、滿天の光輝に沐浴しつゝ、其面前に横たはるを見しが如し、これ實に再生したるなり、生命の新らしきに歩行なり、奮きは悉く去つて万物一新せるなり、抑も歐米の深遠なる神學者等が「基督信徒の意識」と稱するものは即ちこの思想感情を指して云ふなり、

古來キリストの道が此世に傳播し且世の千種万別の困難ある境遇に打勝ちし所以のものは實にこの意識の力にあり、この聖靈の恩化にあるあり、吾人はこの確實を吾人の手に握る故に論者の批評を恐れざるなり、暴徒の迫害を厭はざるなり、自己の荏弱を苦慮せざるなり、喜悅勇氣、生命、勝利はこれ實に吾人が奏樂の調子となるあり、是に於て知る看よ我は世の未までも爾曹と偈にあるなりとのキリストの約束は決して吾人を欺かざるを、讀者よ爾はこの聖靈の恩化を持つか、このキリス

トの力を持つか、神とキリストは聖靈によつて爾の中情に住み玉ふ乎、若し然らば恐るゝ勿れ、爾は既に日本に打ち勝てり、

### 第十五章 使徒パウロの信仰

兄弟よ、我ふんぢらに示す、我が曾て爾曹に傳へし所の福音は人より出るに非ず、蓋はわれ之を人より受けず、亦教へられず、唯だイエスキリストの默示に由つて受けられたればあり、

使徒パウロ

キリストはその直弟子の心に如何なる感覺と印判を遺せしや、最初の信徒等はキリストに對して如何なる信仰を抱持せしや、之を知らんと欲せば先づ須らく使徒パウロの信仰を論究すべし、夫れ使徒パウロは古今未曾有の大革命の時代に生存し、舊き猶太教廢り、新らしき基督教の興りしに關しては、大に興りて力ありし人あり、彼は素と基督教の敵にして迫害者中の錚々たるものなりしが、一旦大に悔悟する處ありて、飄然としてキリストの徒となり、其後三十有餘年終始一日の如くキリ

基督教に於けるパウロの位置

ストの福音を宣傳する爲めに、身命を犠牲にせし處の人なり、其志操の皓潔なる、其目的の尊貴なる、其心事の公明正大ある、古今稀に見るの人物なり、余輩は斯の如き位地を占めたる、斯の如き人物がキリストに付て抱きし信仰の如何を知るは、今日に於て、甚だ必要の事なりと信するなり、之に加ふるに、余輩が特更に茲にパウロの信仰を論せんとするは、之をあすに必要なる材料の十分備はれるが故なり、何をか此材料と云ふ、曰くパウロの四大書翰これあり、夫れ羅馬書哥林多前書同後書加拉太書は使徒パウロの書翰として十分信用を置くべき者にして、極端なる懷疑論の主唱者たるチウエピングンのパウロも疑ふ能はざりし處のものあり、パウロの肝膽はこの中に顯らばれ、パウロの信仰と人物を知るには實に屈強の材料なりとす、夫れ四福音の如き使徒行傳の如き、余輩を以て之を見れば、十分信用を置くに足るの記録にして之を疑ふ

の理由を發見する能はずと雖も不幸にして世の懷疑的論者中その確實を疑ふもの少なからず故に若しこの諸書を材料として最初の弟子等の信仰を論せんとせば須らく先づその確實なるや否を論明せざる可らず之に反してパウロの四大書翰は信者不信者の區別なく福音主義の敵も味方も異口同音に確實となす處のものあれば之に基きて初代信仰の如何を研究するは宛も大盤石の上に家を建つるに似たり是れ余輩の甚だ以て愉快となす處あり

余輩がパウロの四大書翰を通讀するに際し第一に余輩の心を撃つものはパウロがキリストを信じ彼を以て己れの生命となせしことはあり彼ガラテヤ書二〇二十に告白して曰く我キリストと偕に十字架に釘られたり既やわれ生けるに非ずキリスト我にありて生けるあり今われ肉體に在りて生けるは我を愛し我が爲に己を捨てしもの即ち神

パウロ死  
してキリ  
スト生く

の子を信するに由りて生るありとこれ即ちパウロが信仰の骨髓たりしなり曩に彼れ未だキリストに従はざりし中は自尊自負自義自贊の精神其胸中に充ち満てり神に對して熱心ならざりしに非ず倫理の道に明かならざりしに非ず品行端正志氣慷慨ならざりしに非ず然れども其思想の中心は即ち己れ自身にして其神に盡し人に盡さんとせし處悉く終に自己の私に陥れり然れども一旦キリストの信仰彼が胸中に生せしや否や彼は全く一新したる人物となれり夫れキリストの道を迫害せし者が變じてキリストの傳道者となりしことは大變化ありしに相違あり然れどもこれ只外形上の變化たりしに過ぎず彼が人物の一新とは彼が心志の一新を云ふなりパウロは相變らず神に對して熱心にして倫理の道に明白なり其品行端正にして慷慨雄壯の人たりき然れども其心志の方針に至りては實に天地の相異ありしなり彼

れが先きに依頼せし自己は死して、キリスト之に代りて生き、彼の私心去りてキリストの心入り來れり、仁愛謙遜溫柔平和喜悅の聖氣は、臨然たる春風の如く天より吹き來つて、彼が胸中に充滿せり、其狀や宛も窮陰殺々の嚴寒の時候去りて、陽氣生々花開き、薰滿つる春日の來るが如くなりき、誰かパウロの書翰を讀みて、彼がキリストを思ふの親切なりしに感ぜざらんや、「キリストの僕パウロ」キリストにありて爾曹を愛す、「キリストの平康爾曹にあれ」、「教會の基礎はキリストなり」、「爾曹はキリストの屬なり」云々又「キリスト」「イエス」「主」等の語、其書中に充滿す、以てパウロがキリストを思ふの誠實と熱心とを知るに足る、公平坦意パウロの書翰を讀む者は、火を見るよりも明白にキリストはパウロの生命たりしことを知らん、

又キリストはパウロに取りて神たりしなり、神はキリストにありて世

キリスト  
はパウロ  
の神

人を愛す、神はキリストにありて世をして己と和せ玉ふ、キリストは素と神の躰に在せしかども、其榮をすて、謙り、人間となり玉へり云々、パウロは一たびも後世の神學者の所謂三位一躰の説を辨明せしことあらず、然れども丁寧反覆論して止まざるもの、曰神はキリストに在て顯現せり、曰く罪人がキリストを信する時には神と和らぐを得、曰く吾人キリストに、ある時には神にあるあり、キリストを見る時には神を見るありと、之を譬へば神は靈にして見るべからず、万有は神の躰にして神の思想を現はす、自然世界は神の四肢百体の如く、その智と權とを顯はす、万有の中一として、顔面が人心を表はす如く、十分に神を顯はすものあらず、獨りキリストは神の獨生子にして神の顔面あり、神の心思仁愛はキリストに在つて顯はる、夫れ人の顔面は人に非ず、人は靈なれば見るべからず、然れども見る可らざる靈を見るは人の顔色言語にあり、



故に亦人の顔面はこれ人なりと云ふを得可し、キリストは人性を全備したれば絶對にして靈體なる神には非ざりし也、然れども其心志言行は即ち神の心志言行なりき、彼は更新したる人類の元始にして、亦その首頭あり、神はキリストの中に充盈す、キリストを見る時は則ち神を見るあり、キリストは即ち吾人の神なり、パウロがキリストに對するの思想蓋し斯の如きものありしならん乎、

更に又キリストはパウロに取りて無上の友たりしなり、パウロが三十餘年間の傳道中常に共にありて慰めし者はキリストなり、或ハエルサレムにありて、或はコリントにありて、夢にパウロに現はれ、其精神を勵ませしものはキリストなり、パウロは一旦利營功名の途を擲つて以來その日々境遇は迫害と苦痛となりき、この間にありて彼の只一の樂はキリストなりしなり、生前すでに日々の交誼をなし且つ死後彼を待

キリストは無上の友あり

つものはキリストなりき、パウロ曾つてピリッピの教會に書き送りて曰く、わが生けるはキリストの爲め、また死するは我が益なり、孰れを擇ぶべきか我これを知らず、我この二の間に介れたり、我願は世を去りてキリストと共に在らんこと也、これ最も美事ありと、蓋し彼思へらく、假令この世に於て一の幸福なくとも我之を意とするに足らず、若し世を逝りて後主キリストの笑顔を拜し一言の賞詞を得ば即ち足れりと、是に由て之を観ればパウロの信仰はユニテリアン主義の信仰に非ずして、所謂福音主義の信仰なりしや明瞭ならずや、ユニテリアン主義のキリストは聖人なり、二千年前十字架に釘られて、而して烏有に歸せし所の歴史上の人物たる耳、之を譬へば美はしき石像を見るが如し、其巧妙殆んど眞に迫ると雖も、冷々たる蠟石にして、親愛を以て之に近づく可らず、之に反してパウロが信愛して以て一身を献せし所のキリストは

生々瀟々たる活人物たりしあり、蓋し基督教がユダヤに起つてローマ帝國に勝を占めし所以は一にこの信仰にありしなり、其後歐米にありて屢々人心を振起奮興して、現今其全盛を宇内に極めんとするもの亦實にこの信仰にある也、ユニテリアン主義の信仰は人間の精神を鼓舞活動し、世界に大義を明かにし幸福を満たすの功績未だ顯はれざる耳ならず、亦これ基督教固有の信仰に非ざるなり、

### 第十六章 自身に關するキリストの證言

婦いひけるはキリストと稱ふるメツシヤの來らん事を知る、彼來らん時凡べての事を我儕に告げん、イエス曰けるは爾と語る所の我はうれあり、  
約四〇廿五

余輩は前章に於て使徒パウロの信仰を論じたり、パウロがキリストに對して如何の感情と思想とを抱きしかを明かにせんことを勉めたり、今茲に余輩はキリストが彼自身の品性と職分に付き何等の思想を抱きしかを論ぜん、欲す而して之を論ずるに當て、余輩は極端の反對論者

キリスト  
は自ら救  
世主なり  
と云へり

に向つて幾十歩を譲り、強ち四福音書を以て悉く眞實無謬の書とは假定せざる可し、余輩は試みに四福音書中多少の誤謬ありとなすも、亦其中には確實疑ふ可からざるの言行のあるを信す、而してこれ等の言行は一種特別の色あつて何人も一見して以て其眞實なるを感すべきものなることを信す、故に余輩はこれより此等の二三の言行に基つきて、キリストの品性と職分を論ずるは、甚利益あるものと信するあり、  
(一)キリストは自己を以て世の救主とあせり、苟くも福音書の大意に通ずる處の人ならば、誰かキリストが明かに自らは世の救主なりと主張せしことを疑ふを得んや、彼口を開けば即ち言へり、天國近し悔改せよと、又曰く天國の福音と、又曰く天國の義を求むべしと、蓋しキリストの志は世界の万人を罪惡の中より救ひ、以て天國の民たらしむるにあり、彼は斯の如く救はれたる人民を集めて、一の王國を此世に興せり、これ即

ち天國なり、當時のニメヤ人は救世主の降臨を待望し、耳目に觸るべ  
 き世俗的の王國を起さんとを希望せり、故にイエス世に出で、道を宣  
 傳せしに當つてや、彼等はイエスを擁して世俗的の王國を起さんとせ  
 り、曾て彼等が迫り問ふを見て、イエス答へて云へり、天國は顯はれて來  
 るものに非ず、看よ茲にあり、看よ彼處にありと云ふべきものにあらず、  
 天國は爾曹の裏にありと、即ちキリストの王國は靈妙なる心靈上の國  
 なることを明言するものなり、而してキリストは此王國の王を以て自  
 任し、曾て其憲法とも稱すべき山上の垂訓をなすに當り、告げて曰く、古  
 の人に告げて云々と云へり、然れど我爾曹に告ぐ云々と(太五〇廿以下)  
 自己を以て古來の聖賢に對比し、彼等ハ神の名に託りて教を垂れしが、  
 我は自己の名にて教を立つべしと也、又曰く我來るは律法と豫言者を  
 滅さんとに非ず、却て之を成就せんが爲なり(太五〇十七)と見るべし、

自らを以  
 て普通人  
 間と區別  
 す

リストは自己を以て古來の聖賢に優るものとなし、古來の不完全なる  
 教を完成するものとなし、神の權を有つて神に代つて垂教するの權あ  
 るものとなせしを、又キリスト教の弘布することに付て、莫大の期望を  
 有し、その始めは微々として芥種の如く小なりと雖も、其成長するや、遂  
 に大樹とならんと云へり、蓋し基督教が草莽の一青年を始祖として、最  
 爾たる一小國より起り、遂に全世界の民を抱有し、萬國の智識と富とを  
 支配するに至るべきを預言せるものあり、茲に不思議なることは、二千  
 載の下キリストの王國はキリストの預言の如く日々に隆盛にあり、將  
 に全世界の宗教とあらんとしつゝ、ある事是れあり、  
 (二)キリストは自己を一般の人間と區別し、上帝のことに付ては、人間の  
 有する能はざる特別の知識を有すと主張せり、人に教へては、祈る時に  
 我儕の父と稱へしめたり、然れども自ら祈る時は必らず我父よと云へ

り、人間を一般に指して神の子供と云へり、然れども自己を指して、子と云へり、曾て其道を信するもの、中に智者學者乏しくして貧者愚民の多さを見て深く心に感慨する處あり、曰へり、父は我に萬物を興へ給へり、父の外に子を知るものなく、又子及び子の顯はす處の外に父を識るものなしと、太十一〇廿七其意に曰く、天下億万の人遂にキリストに來り従ふべし、茲に柔和謙遜なる人民の來り従ふはこれ其始なり、智者學者は其學問智識に誇ると雖も終に神を知る能はざる可し、(哥前一〇二) 十廿一の意とよく合す、又十九世紀哲學の傾向は凡神教或は不可識說に歸せんとするを見て驚くに足らざるあり、これ神の經綸によく適へる者と言ふべし、神は無量無窮なり、人智の能く悟り得べき限りに非ず、獨りキリストは神と一心にして、キリストに由りて以つて神を知らんとする者耳、誠によく神を知り得べし、キリストは神人間の階梯中保

人の罪を  
赦すの  
權あり

なり、キリストは實に此特別なる位置に立ち、且この特別なる知識を有す、これ亦彼が救世主たる理由の一なりとす、

(三)キリストは人間の罪を赦すの權ありと明言せり、福音書中この事を記すこと明白なり、曾て一人の癡瘋患者あり、四人して之を昇き來りてキリストの前に置く、イエス之を見て子よ爾の罪赦るさると云ひしかば、傍らに立てる學者等不平に堪へず、心竊かに議して言へり、神にあらすして人の罪を赦す者は誰ぞやと、イエスその思を察し、之に答へて曰へり、爾の罪赦さると云ふと、床を執りて歩めと云ふと、孰か易きと、(太九〇六可二〇十路五〇廿五)其他イエスが人に向つて爾の罪赦さる安然にして行けと告げしことあり、(路七〇四十八)是に由て之れを觀ればイエスは人の罪を赦すの權ありと自信せしとは疑ふ可らざるの事實なりとす、夫れ人の罪を赦すの權は獨り上帝の特有に屬す、上帝にあらす

して之を執行し得るものある可らず、イエスはエマヤ人にして深くこの理を會得せり而して憚らずして公言して曰、我の人の罪を赦すの權あり、凡て勞れたるもの、重きを負る者我に來れ、我爾曹を息ませんと  
〔太十一〇廿七〕豈彼の其身人間ありと雖も亦其心神と合一し其なす處悉く神の意に適ひ自己はこれ神の代表者なりとの覺悟ありしとせざる可けんや、

〔四〕キリストは自己を以て人間の獻身と信仰の目的となせり、人倫の中孰れか夫婦親子の倫よりも神聖なるものあらんや、然れどもキリストは明らかに自己を以て夫妻親子より優りて愛すべき貴むべきものとなせり、其弟子等に告げたる言に曰く、我よりも父母妻子を愛する者は我に適ひざる者なり、凡そ我に従はんと欲する者は、その父母妻子兄弟姉妹また己の生命をも憎む者に非ざれば、我弟子と爲ことを得ずと鳴

呼この神聖ある大倫の中間に立ち入り而して吾人に告げて、彼よりも我を愛すべし、彼に身を委ねずして我に委ねべしと云ふ者の誰ぞや、これ豈イエスキリストは實に神の獨生子にして、神自身の發現あるが故に非ざらんや、

以上四ヶ條は世の反對論者の以て確實とせざるを得ざる處の言行に基きて論じたり、若し余輩の論せし處をして誤なからしめばキリストは普通一般の人にあらず、實に世の教主にして神と同性一意の神の獨生子なりと云ふの眞理に歸着せりと信す、これ豈使徒パウロがキリストに對して懷きし處の感情と思想によく符合するものにあらざらんや、然ればパウロの信仰は即ちキリスト自らの教に基きしものにして、彼の作爲より起りしものに非ざるや明白なりと謂ふべし、

第十七章 祈禱

あゝ神よ、まかの溪水をまたひ喝へくが如く、わが靈魂は爾をまたひあへく  
なり、わが靈魂は渴ける如くに神を慕ふ、活ける神をまたふ、何れの時にか  
我ゆきて神のみまへに出でん、………蓋はエホバの憐憫をほどこし給  
ふ、夜は其の歌われ共により、此の歌は我がいのちの神にさぐる祈あり

詩篇

人に祈す  
るの動物

世界廣しと雖も人種多しと雖も未だ曾て祈りせざるの民はあらざる  
なり、人は祈をする動物なり、人間の靈が宇宙の靈たる神と交はらんと  
を願ふは宛も磁針の必ず北方を指して止まるが如し、例せば死んど禽  
獸に同じき野蠻人も其の將さに出で獵せんとするや一本の枯木を地  
上に突き立て、その好運を祈るあり、況んや文運隆盛自ら稱して開化  
を誇るの人民に於ては神明と祈り交はるを求むるの情愈深切なるを  
見るをや、若し細密に世人が祈禱をなすの心術と方法とを觀察せば則  
ち千狀万態或は神明に媚び諛ふて福運を求むるあり、或は少許の供物

真正なる  
最上の祈

天地は神  
の榮光を  
表はす

を献げ以て神明の歡心を買はんとするものあり、或は器々然として其  
願意を公訴し強ひて神明の許諾を得んとするものあり、或は斷食苦行  
し寒中身を瀑布の下に晒らしなせして以て神明の憐憫を乞ふものあ  
り、是等は實に識者たるもの、憫笑嫌厭を免る可らずと雖も要するに  
人心が神明を求め之と交はらんとするの情の甚だ不完全に甚だ卑劣  
に發表したるものに過ぎず、其の進んでメビデの祈となり、ソクラット  
の祈となり、孔丘の祈となり、キリストの祈とあるに至つては人誰かま  
た之を非議するを得んや、見るべし人の生れながらにして此の宇宙に  
神明あるを知り之と交通せんことを求むものなるを、  
もろくの天は神の榮光を表はし、穹蒼は其の手の工を示す、この日こ  
とばを彼の日に傳へ、このよ智識を彼の夜におくる、語らず言はず其聲  
きこえざるに其の響は全地に遍ねく其言は地の極にまで及ぶ、(詩十九

祈は善心を求むることあり

の一四實に然り若し好秋一日杖を郊外に曳て天地の美妙幽壯を觀せば誰か造化主の大能大智を感せざるものあらんや況んや復た古今聖賢の皎々たる心事を鑒がみ殊に我主イエスキリストの光明昭々たる心事を知るもの誰か宇宙の神は即ち正義仁愛の神なるを疑はんや夫れ此の宇宙は現象なり其の奥には心靈の世界あり理法眞理正義仁愛活々潑々として常に自らを表顯して止まざるもの此れ天地の眞跡なり吾人はキリストに教へられて此の眞跡を稱して活ける神と云ひ又天の父と云ふ而して祈禱は吾人の衷心を放開して此の神と交はることなり

又祈禱は善賜を神に求むると也イエス曾て教へて曰く求めよ然らば與へられ尋よ然らばあひ門を叩けよ然らば開かるゝことを得ん爾曹の中誰か其子パンを求めんに石を予へんやまた魚を求めんに蛇を予

祈は人心の呼吸なり

へんや然れば爾曹惡しき者ながら善賜をその子に與ふるを知る況して天に在す爾曹の父は求むる者に聖靈を與へざらんや(太七〇七一十一路十一〇十三)吾人は名譽利達を求めんとせば未だ其の必ず神意に適するや否を知らず智識學問を求めんとし息災延命を求めんとすれば未だ其の必ず神意に適するや否を知らず然れども善き心を求むる時には何の場合に於ても其必ず神意に適するを知るなり夫れ吾人が神と交はるは至正至愛の神と交はるなり豈に至正至愛の靈は吾人の衷情に注いで汎濫たらざらんや吾人は必期して且つ忍耐して神の至善を熱求す可き也吾人の至誠は必ず神明に通じて而して心日に月に化して終に至善の域に達せん

蓋し祈は人靈の呼吸なりもし吾人は五分時間も呼吸せざれば忽ち氣絶閉息す又もし常に腐敗したる空氣を呼吸せば身体自ら病みて精神

爽快なる能はず、祈禱せざる處の人心亦斯の如く決して勇壯健全ある能はず故に基督信者は毎朝毎夕のみならず又時々刻々心を神明に通じ、神の善心を求め又その啓導を仰ぐを常とす、而して後ち始めて心事皎潔精神爽快なるを得べく、永生の靈氣を以て其心に満たすを得べき也、詩に曰く正しき人はエホバの法をよるこびて日も夜も之を思ふ、かかる人は水流のはとりに植ゑし樹の期にいたりて實をむすび葉も亦た凋まざる如くろのあす處皆な榮えんと、

又祈禱は吾人の心情を開き神と一致せしむること也、蓋し吾人の心は平素多くは天意に違ひ、又人と相背す故に動易すれば天を怨み又人を尤む、此れ實に吾人の病あり、而して斯る心ある時には人生の事大小となく一として完全に優美に成就するを得ざる也、譬へば人の心は樂器の如く人生の出來事は樂師なり、樂器もし既に其正調を失ふ時にはモザ

祈は神と一致する  
ことあり

人心は古びたる樂器あり

ト、メンドルソンと雖も亦其妙技を演ずる能はざるが如く、吾人の心は古びたる樂器にして容易に世の風塵に満ちて正調を失ふが故に、物來て之に觸るゝあれば忽ちにして不和不諧聞くに堪へざるの音調を發す、怨むあり、怒るあり、争ふあり、猜むあり、小は家庭夫婦の事より大は天下國家の事に至るまで吾人の憂患とすべきは實に此の一事にあらすや、然れば吾人は常に神に祈り此の心情を正調にして、凡そ物に觸れ事に遭ふ毎に正さに思ふべき様に思ひ、正さに爲すべき様にあすを得んことを求むるは豈に尤も切要の事に非ずや、故に曰く祈禱は吾人の心を擧げて天意と、同調あらしむることなりと、

以上これ祈禱の最要點を指して云ふものなり、其他細事に至つては疾病飢餓の爲めにも祈るべし、朋友親戚の爲めにも祈るべし、天下國家の爲めにも祈るべし、若し天意に適ふ時は則ち義しき人の熱心ある祈

祈の細事

ソナ



は力あるものあり、雅五〇十六神は靈にして在さる處なし、又能はさ  
 る處あり、豈に吾人の祈を聴き玉はざらんや、新約書を讀むに、キリスト  
 も其弟子の爲めに祈り給ひしを見る、又パウロも諸教會の爲めに祈れ  
 り、教へて曰く、何事をも思ひ煩ふ勿れ、唯毎事に祈禱をし、懇求をし、且つ  
 感謝して己が求むる處を神に告げよ、神より出て人の凡て思ふ所に過  
 ぐる平安は爾曹の心と意をキリストイエスに因て守らんと、腓四〇六  
 一七、誠に祈禱は基督教徒が身を寄する平安の港なり、

基督教新論畢

明治二十四年十一月十二日印刷  
 同 年十一月十七日出版

版權所有

發行所

著者 發行兼印刷者 賣捌所  
 全 全

横井時雄

福永文之助

警醒社書店

福音社

大塚書店

函館福音舎

(東京新橋汽關社印行)

警醒社出版并に賣捌書廣告

○基督教新聞

每週一回發兌○定價一部金二錢五厘○三ヶ月前金三十一錢五厘○六ヶ月前金六十錢○一ヶ年前金一圓十四錢府外遞送の分は右の外に郵税申受くべし

基督教新聞は基督教の主義新聞中尤も古くして尤も廣く行はるゝものなり其唱道する所は眞正の宗教。高潔なる道德。正義ある社會。清潔なる文學。善良なる教育。にて義と愛の空氣を日本社會に充塞せんとするは吾新聞の最も自任する所あり

○六合雜誌

○毎月一回發兌○定價一冊金八錢○六ヶ月前金四十三錢○一ヶ年同八十錢○右の府の内外を論せず  
遞送料を要せず

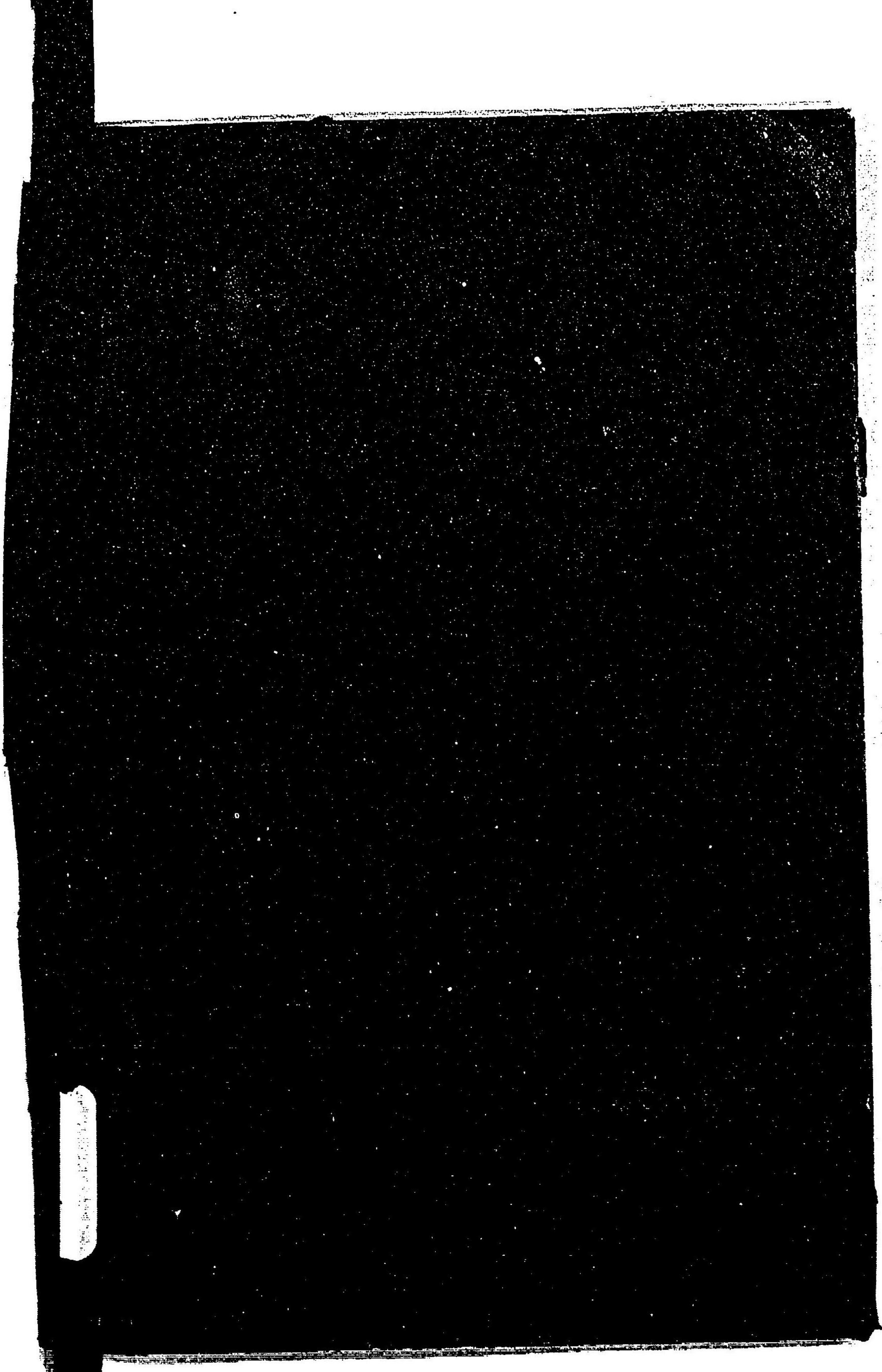
此雜誌は神學、哲學、修身、學術、教育、政事等凡そ世の風化を補ひ實益を裨はん論說記事を掲ぐるものなり我國雜誌の類少からずと雖も其議論の高尙なる其主義の純白なる恐らくは此雜誌の右に出るものあからん」明治十三年十月初號を發兌し爾來毎月之を發行し已に百三十一號に及へり

○訂正 立志の礎

松村介石氏著

定價三十錢

19
294



Small, illegible text or markings on a white rectangular label at the bottom left of the dark area.

19  
277

0.20460-000-1

19-277

基督教新論

横井 時雄/著

M24

ABI-0270



2